

茨城県教育財団文化財調査報告第386集

しんめいせき 神明遺跡

一般県道守谷藤代線道路整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成26年3月

茨城県竜ヶ崎工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

茨城県では、市町村や県の枠を越える広域的な交流と連携を進めるため、また、県土の均衡ある発展を支える基盤として、その骨格となる一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めています。

その一環として、茨城県竜ヶ崎工事事務所は、取手市下高井地区において、一般県道守谷藤代線道路整備事業を計画しました。

しかしながら、その事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である神明遺跡が所在することから、記録保存の措置を講ずる必要があるため、当財団が茨城県竜ヶ崎工事事務所から埋蔵文化財発掘調査の委託を受け、平成23年4月から5月、平成24年7月の3か月間にわたりこれを実施しました。

本書は、神明遺跡の調査成果を収録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県竜ヶ崎工事事務所から多大な御協力を賜りましたことに對し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、取手市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、深く感謝申し上げます。

平成26年3月

公益財團法人茨城県教育財團

理事長 鈴木欣一

例　　言

1 本書は、茨城県竜ヶ崎工事事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財團が平成 23・24 年度に発掘調査を実施した、茨城県取手市下高井 2041 - 4 番地ほかに所在する神明遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

　　調査 平成 23 年 4 月 1 日～ 5 月 31 日　　平成 24 年 7 月 1 日～ 7 月 31 日

　　整理 平成 26 年 1 月 1 日～ 3 月 31 日

3 発掘調査は、調査課長樋村宣行のもと、以下の者が担当した。

平成 23 年度

　　首席調査員兼班長　　稲田　義弘

　　主任調査員　　本橋　弘巳

　　調　　査　　員　　近江屋成陽

平成 24 年度

　　首席調査員兼班長　　稲田　義弘

　　調　　査　　員　　近江屋成陽

　　調　　査　　員　　大久保隆史

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長原信田正夫のもと、次席調査員木村光輝が担当した。

凡　　例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標に準拠し、X = - 8,200 m, Y = + 18,320 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へ A, B, C …、西から東へ 1, 2, 3 … とし、「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へ a, b, c … j、西から東へ 1, 2, 3, … o と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 F - 炉跡 FP - 炉穴 P - ピット PG - ピット群 SD - 溝跡 SF - 道路跡

SI - 堅穴建物跡 SK - 土坑

遺物 DP - 土製品 Q - 石器 T - 瓦 TP - 拓本記録土器

土層 K - 扰乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 800 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。



焼土



炉・火床面・繊維土器断面



煤



●土器



□石器・石製品



- - - 硬化面

4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物については、各々総量を記述した。

5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位は m, cm, g で示した。なお、現存値は〔 〕を、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

6 堅穴建物跡の「主軸」は、炉を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

7 今回の報告分で、調査段階での遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは以下のとおりである。

変更 FP 1 → F 1 FP 2 → FP 2 · F 2

PG 1 P 8 · P 14 ~ 20 · P 22 ~ 24 → PG 1 P 6 ~ 16

欠番 SK29 SK33 PG 1 P 6 · 7 · 9 · 10 · 11 · 12 · 13 · 21

目 次

序

例 言

凡 例

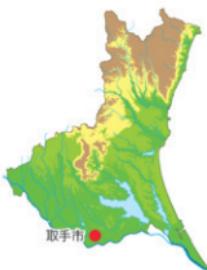
目 次

概 要	1
第1章 調査経緯	3
第1節 調査に至る経緯	3
第2節 調査経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 位置と地形	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の成果	11
第1節 調査の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	13
1 縄文時代の遺構と遺物	13
(1) 壺穴建物跡	13
(2) 炉穴	20
(3) 炉跡	24
(4) 土坑	25
2 その他の遺構と遺物	34
(1) 道路跡	34
(2) 溝跡	34
(3) 土坑	36
(4) ピット群	37
(5) 遺構外出土遺物	40
第4節 まとめ	41
写真図版	PL 1 ~ PL 6
抄 錄	

しんめいいせきの概要 神明遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

神明遺跡は、取手市の北西部に位置し、西から東へ流れる小貝川右岸の標高 20 m 前後の北相馬台地上に立地しています。一般県道守谷藤代線道路整備事業に伴い、遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため、茨城県教育財団が平成 23・24 年度に発掘調査を行いました。



調査の内容

今回は 2,400m²を調査しました。調査の結果、縄文時代の竪穴建物跡 2 棟、炉穴 4 基、炉跡 2 基、土坑 29 基などを確認しました。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、石器（有舌尖頭器、鎌、敲石、石錘）などです。これらの遺構や遺物から、この地域の縄文時代早期後葉のころの生活の様子が分かりました。



神明遺跡調査 2 区全景（平成 24 年度）



第1号竪穴建物跡の土層の様子



第2号竪穴建物跡の完掘の様子



第5号炉穴の完掘の様子



出土した石器（有舌尖頭器、鎌、敲石、石錘）

調査の結果

当遺跡は、縄文時代早期後葉の集落跡であることが分かりました。人々は楕円形の竪穴建物に住み、屋外にある爐で火を焚いて、調理をして暮らしていたようです。縄文土器は、食べ物を煮炊きするために使われていました。また、石の鎌や敲石、石錘などの生活の道具が出土しています。鎌で狩猟をしたり、敲石で木の実を粉にしたりして、豊かな食生活であったと考えられます。また、石錘は、漁で使う網の重りや織物に使う重りとして、使われたと考えられています。

当遺跡から東へ続く台地上にも、縄文時代早期後葉の集落跡が確認されています。この時期、人々は北相馬台地上で、狩りや採集などをを行いながら、生活をしていたことが分かりました。

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

平成21年5月26日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道守谷藤代線道路整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成21年9月10日に現地踏査を行い、2期に分けて対応することとした。

第1期として、平成22年12月6・7・10日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成23年1月18日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、事業地内に神明遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成23年2月21日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成23年2月22日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、工事着工前にそれぞれ発掘調査を実施するように通知した。

平成23年2月24日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道守谷藤代線道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成23年2月24日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、神明遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として公益財團法人茨城県教育財團を紹介した。

公益財團法人茨城県教育財團は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成23年4月1日から5月31日まで発掘調査を実施することになった。

第2期として、平成23年4月13日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成23年4月22日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、事業地内に神明遺跡が所在すること及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成24年2月7日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第94条の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成24年2月15日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、工事着工前にそれぞれ発掘調査を実施するように通知した。

平成24年2月20日、茨城県竜ヶ崎工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道守谷藤代線道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成24年2月24日、茨城県教育委員会教育長は茨城県竜ヶ崎工事事務所長あてに、神明遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として公益財團法人茨城県教育財團を紹介した。

公益財團法人茨城県教育財團は、茨城県竜ヶ崎工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成24年7月1日から7月31日まで発掘調査を実施することになった。

第2節 調査経過

神明遺跡の調査は、平成23年4月1日から5月31日、平成24年7月1日から7月31日までの3か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	平成23年		平成24年	
		4月	5月	7月	
調査準備 表土構造 確認					
遺構調査					
遺物洗浄 注写 整理					
撤取					

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

神明遺跡は、茨城県取手市下高井 2041 - 4 番地ほかに所在している。

取手市は、茨城県最南部に位置し、利根川を挟んで千葉県と隣接している。市の南部は利根川に沿った低地、北部は小貝川に沿った低地が広がっている。また、それらの低地に挟まれて東西に細長く北相馬台地が続いている。小貝川、常陸川、鬼怒川、利根川の支流が樹枝状に入り込み、変化に富んだ地形を形成している。市街地より東側では、小文間の小台地や隣接する利根町の小台地が独立した台地として連なっている。市の地形形成に深く関与した常陸川や鬼怒川は、江戸時代の「利根川東遷」と呼ばれる大規模な河川改修工事により、群馬県水上町大水上山を水源とする関東平野を貫流する利根川と名をかえて、市の南部を西から東へ流れ、千葉県との県境を形成している。小貝川は栃木県那須町八ヶ代付近を水源とし、蛇行しながら市の東部で利根川と合流している。

北相馬台地の地層は、第四紀洪積世古東京湾時代に堆積した成田層が基盤層となり、下部から成田層下層、成田層上層、竜ヶ崎砂礫層、常総粘土層、関東ローム層の順で堆積している。堆積状況は、水平で単調であり、褶曲や断層は見られない¹⁾。

取手市の大部分を占める北相馬台地は、宇都宮市域から続く台地の南部にあたり、繩文時代前期にピークを迎える繩文海進時には、半島状に突出していたと考えられる。台地の標高は 20 m 前後で、波浪上の微起伏が連続している。当遺跡は取手市北西部、小貝川と利根川に挟まれた標高 21 m ほどの北相馬台地北縁部に立地している。北側の小貝川に沿った低地及び南側の利根川に沿った低地から小支谷が樹枝状に入り込み、遺跡は限られた平坦面のある尾根状の台地上に位置している。

第2節 歴史的環境

神明遺跡が所在する取手市は、大小の河川、低地、台地と変化に富んだ自然環境の中で昔から人々の生活が営まれており、数多くの遺跡が残っている。ここでは、当遺跡周辺の主な遺跡について時代別に述べることにする。

旧石器時代の遺跡としては、柏原遺跡〈24〉があり、細石刃や細石刃核、彫器及び削器等がまとまって出土している。この石器には東北地方の日本海側に分布する硬質頁岩が使われている。市内はもとより、本県南部における代表的な細石器文化層の確認された遺跡として広く知られている²⁾。また、大渡遺跡〈26〉からも旧石器時代と思われる石器や剥片が出土している³⁾。

繩文時代の遺跡のうち、草創期のものは、椿山・大日原遺跡〈2〉、市之代古墳群〈55〉等があり、撫奈文土器片や稲荷台式土器の土器片が出土している⁴⁾。早期のものは、当遺跡の東方向に下高井向原遺跡〈5〉や甚五郎崎遺跡〈20〉が確認されている。その他に大渡遺跡、東原遺跡〈21〉、市之代古墳群、堀尻遺跡〈38〉、堂ノ脇遺跡〈9〉、同地貝塚〈58〉等が存在する。早期後半の条痕文系土器の時期には、台地の縁辺部及び小高い尾根状の台地上に立地した小規模な遺跡が多数出現している。また、大渡遺跡や下高井向原遺跡の土坑内

貝塚から出土した貝類は、ハマグリ・アサリ・マテガイ・ハイガイなどの軟水産が主体であることから、当遺跡周辺まで海が広がっていたと考えられる⁵⁾。前期のものは、新屋敷遺跡（31）、椿山・大日原遺跡、向山遺跡（15）、上高井糠塚古墳群（12）、白旗遺跡（30）、前畠遺跡（23）、郷州原遺跡（33）、同地貝塚、甚五郎崎遺跡等がある。向山遺跡は小貝川に面した台地上にあり、ヤマトシジミを主体としている。海進はピークを過ぎて、次第に海面は下降している⁶⁾。また、新屋敷遺跡からは西関東の諸磯式土器と東関東の浮島式土器が共伴して出土していることから、取手市域は両文化の接点とも考えられる⁷⁾。早期の遺跡と比較して遺跡の規模が大きくなり、各地に点在していた遺跡が、谷の奥に面した台地の内部から河川の台地縁辺部に移動している。中期のものは、陣谷原遺跡（6）、下高井向原遺跡、堀尻遺跡、大渡遺跡、同地貝塚等が存在する。中期後半は遺跡数は増加するが規模は小さくなる。後期のものは、大山遺跡（22）、桶向原1遺跡（46）、大渡遺跡、別当遺跡（29）、東山遺跡（8）、姫宮神社遺跡（54）、郷州原遺跡、同地貝塚等がある。後期になると遺構数がかなり増加する傾向にある。当遺跡の北西800mの神明神社周辺からは、安行1式のミミズク型土偶が出土している⁸⁾。晩期のものは、同地貝塚があり、大規模な後期の集落が継続している。しかし、遺跡数は急減し、集落の立地や居住形態などが大きく変化したことが予想される。

弥生時代の遺跡としては、大渡遺跡、柏原遺跡、東原遺跡、郷州原遺跡等が存在する。柏原遺跡の堅穴建物跡からはゴボウ類・コンニャクイモ類・米類の炭化種子が出土しており、当地でそれらの耕作が行われた可能性がある⁹⁾。

古墳時代の遺跡としては、大渡遺跡、大山遺跡、椿山・大日原遺跡、下高井向原遺跡、桶向原2遺跡（44）、宿畠遺跡（49）、市之代古墳群、同地古墳群（56）、大日山古墳群（18）、上高井糠塚古墳群等が確認されている。大山遺跡からは、古墳時代の堅穴建物跡52棟が確認され、第37号堅穴建物跡から重圓文鏡が出土している。和鏡が堅穴建物跡から出土した例としては県内初である¹⁰⁾。また、同地古墳群や市之代古墳群から大日山古墳群にかけての古墳群は、小貝川をのぞむ台地縁辺部に集中して構築されて、この地域を支配した一族の一連の古墳群としてとらえることができる¹¹⁾。

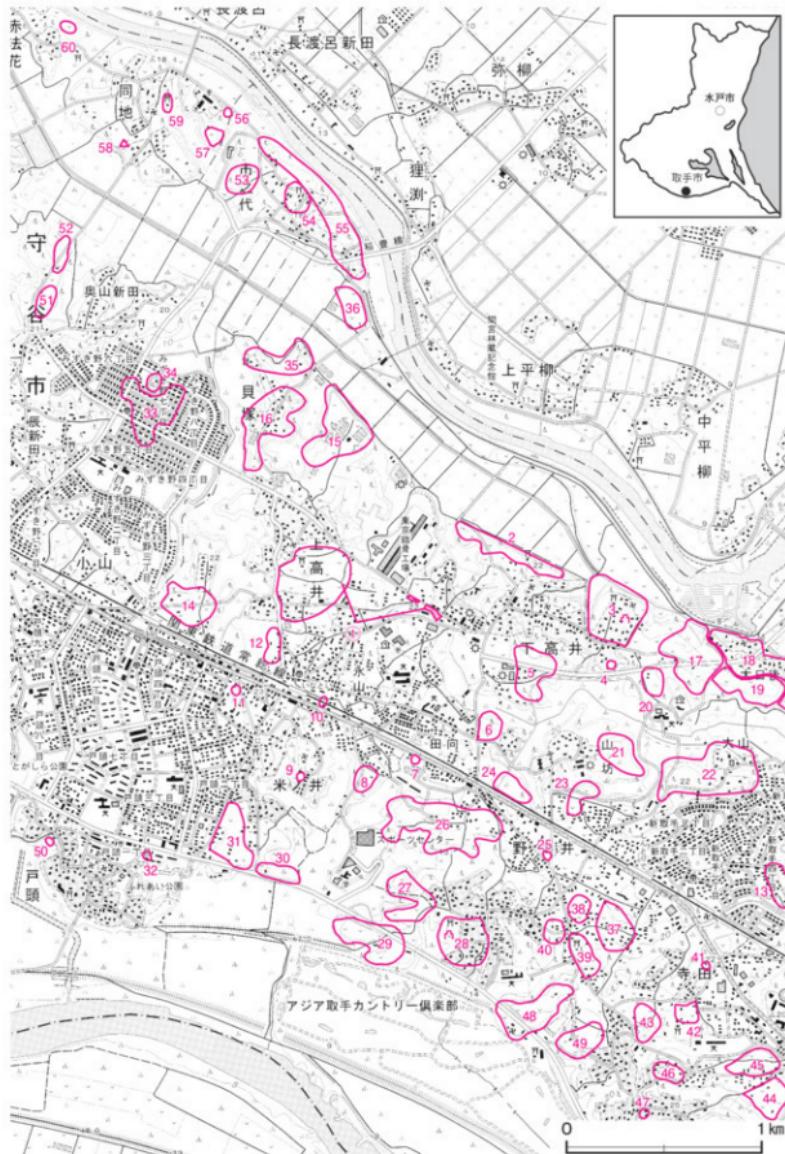
奈良・平安時代の本跡を含む地域は、下総国相馬郡に属している。郷名については、相馬郷や余戸郷等の諸説あり、比定することは難しい¹²⁾。同時代の遺跡としては、如何崎遺跡（4）、向山遺跡、惣遺跡（37）、新屋敷遺跡、甚五郎崎遺跡、下高井向原遺跡、郷州原遺跡等が存在する。下高井向原遺跡の墓坑からは、平安時代後期の和鏡（瑞花双鳳五花鏡）が出土している¹³⁾。

中世以降の遺跡や主な城跡としては、野々井城跡（28）、下高井城跡（3）、大山遺跡等が存在する。戦国時代、取手市域を含む北相馬地域は下総国北部に位置しており、小貝川を挟んで常陸国と接していた。城跡の分布からは、それらの立地が常陸国・佐竹方にに対する北条方の防衛拠点であったことが推定される。現在、多くの城跡が開発により昔日の面影はないが、下高井城跡は主郭及び曲輪などが比較的良好に残っている¹⁴⁾。

註

- 1) a 茨城県農地部農地計画課「土地分類基本調査 龍ヶ崎」茨城県 1987年12月
- b 駒澤悦郎『大山I遺跡2 取手都市計画事業下高井特定土地区画整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』『茨城県教育財団文化財調査報告』第185集 2002年3月
- 2) a 吉澤義一・堀沼良幸『取手都市計画事業下高井特定土地区画整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 大山I遺跡』『茨城県教育財団文化財調査報告』第123集 1997年6月
- b 取手市史編さん委員会『取手市史 通史編1』取手市教育委員会 1991年3月
- 3) 大渡遺跡調査会『大渡遺跡発掘調査報告書』取手市教育委員会 1998年3月

- 4) 諸星政得 宮内真隆『市之代古墳群第3号墳調査報告』取手市教育委員会 1978年3月
- 5) 川島真澄 富山かおる 高下佐保子 飯田美智子 本多昭宏『茨城県取手市大渡I遺跡 平成5年度発掘調査報告書』取手市教育委員会 1994年3月
- 6) 取手市史編さん委員会『取手市史 原始古代(考古)資料編』取手市教育委員会 1989年3月
- 7) 泉水正和『新星敷道跡発掘調査報告書』取手市教育委員会 1996年1月
- 8) 諸星政得 鈴木加津子 鈴木正博『取手と先史文化 別巻1』取手市教育委員会 1984年3月
- 9) 斎沼良幸『取手都市計画事業下高井特定土地区画整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 東原遺跡 前畠遺跡 柏原遺跡』茨城県教育財团文化財調査報告 第143集 1999年3月
- 10) a 許1 a 文献と同じ
b 佐久間好雄監修『図説 稲敷・北相馬の歴史 茨城県の歴史シリーズ』郷土史出版社 2006年2月
- 11) a 許4 文献と同じ
b 許2 b 文献と同じ。
- 12) a 許2 b 文献と同じ。
b 今井隆助『北下総地方史』嵩書房 1974年12月
c 守谷町史編さん委員会『守谷町史』守谷町 1985年3月
d 我孫子市史編集委員会原始・古代・中世部会『我孫子市史 原始・古代・中世編』我孫子市教育委員会 2005年2月
- 13) 中山忠久『取手都市計画事業下高井特定土地区画整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 廿五郎崎遺跡 下高井向原I遺跡 下高井向原II遺跡』茨城県教育財团文化財調査報告 第107集 1996年3月
- 14) a 宮内真隆 泉水正和『大鹿城跡発掘調査報告書』取手市教育委員会 1996年3月
b 鈴木正博 鈴木加津子 加納梓 大貫真理 清水和明 矢野文明 佐藤誠 鹿嶋保 高橋伸子 宮内真隆『取手市内における重要遺跡発掘調査報告 1983』取手市教育委員会 1983年3月
c 宮内真隆 近江屋成陽『下高井城跡』取手市教育委員会 1993年3月



第1図 神明遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「取手」）

表1 神明遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	神明遺跡	○							31	新屋敷遺跡	○			○			
2	椿山・大日原遺跡	○		○	○				32	谷ノ上遺跡	○						
3	下高井城跡					○	○		33	郷州原遺跡	○	○	○	○			
4	如何崎遺跡					○			34	文化財公園遺跡	○						
5	下高井向原遺跡	○		○	○				35	台坪遺跡	○						
6	陣谷原遺跡	○							36	上川辺遺跡	○						
7	中峠遺跡			○	○				37	佃遺跡	○			○			
8	東山遺跡	○							38	堀尻遺跡	○						
9	堂ノ脇遺跡	○			○				39	惣代八幡遺跡	○						
10	出土遺跡					○			40	西光寺前遺跡	○						
11	戸頭神明遺跡	○		○	○				41	遠道遺跡	○						
12	上高井塚古墳群				○				42	遠道前遺跡				○			
13	後山遺跡	○							43	後田遺跡			○	○			
14	大境遺跡	○							44	福向原2遺跡				○			
15	向山遺跡	○			○				45	福向原5遺跡				○			
16	貝塚新田遺跡				○				46	福向原1遺跡	○						
17	台畑遺跡	○	○						47	福向原6遺跡	○		○				
18	大日山古墳群	○		○					48	宿畑2遺跡			○	○			
19	大日後遺跡	○		○					49	宿畑遺跡	○		○				
20	甚五郎崎遺跡	○				○	○		50	水深台遺跡				○			
21	東原遺跡	○	○						51	奥山新田南遺跡			○	○			
22	大山遺跡	○		○	○				52	奥山新田遺跡				○			
23	前畑遺跡	○							53	南割遺跡				○			
24	柏原遺跡	○	○	○		○			54	姫宮神社遺跡	○						
25	五十塚遺跡				○				55	市之代古墳群	○		○				
26	大渡遺跡	○	○	○	○				56	同地古墳群				○			
27	竹ノ代遺跡	○		○					57	同地東遺跡	○						
28	野々井城跡						○		58	同地貝塚	○						
29	別当遺跡	○							59	熊野神社遺跡	○						
30	白旗遺跡	○							60	赤法花遺跡	○						



第2図 神明遺跡調査区設定図（取手市都市計画図2,500分の1より作成）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

神明遺跡は、小貝川と利根川に挟まれた北相馬台地北縁部に位置し、標高21mほどの谷が樹枝状に入り込む台地上に立地している。調査区域の北側は、小貝川へ向かう急な斜面となっており、調査区域は、西から東へ緩やかに傾斜している。微起伏が続く台地上には、当遺跡から東1kmほどに、同時期の遺構が確認されていることから、遺跡は東方向に広がっていると考えられる。調査面積は2,400m²で、調査前の現況は宅地及び山林である。

調査の結果、縄文時代の堅穴建物跡2棟、炉穴4基、炉跡2基、土坑29基、時期不明の道路跡1条、溝跡6条、土坑8基、ピット群4か所を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に7箱出土している。主な遺物は、縄文土器(深鉢)、石器(ナイフ形石器、有舌尖頭器、鎌、敲石、石錘)、土製品(五徳)、瓦片(棧瓦)などである。

第2節 基本層序

調査1区のE 6d3区にテストピット1を、調査2区のH 11h2区にテストピット2をそれぞれ設定し、基本土層(第3図)の堆積状況の観察を行った。テストピット1の第6層の下層が未掘のため、第7層から第9層については、テストピット2のみの観察結果である。各調査区の観察結果は、以下のとおりである。

第1層は、暗褐色を呈する耕作土層である。層厚は16~24cmである。

第2層は、黄褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりは強く、層厚は20~30cmである。

第3層は、黄褐色を呈するソフトローム層である。層厚は20~32cmである。

第4層は、明黄褐色を呈するハードローム層である。層厚は15~30cmである。

第5層は、黒褐色を呈するハードローム層がある。粘性は強く、層厚は36~45cmである。

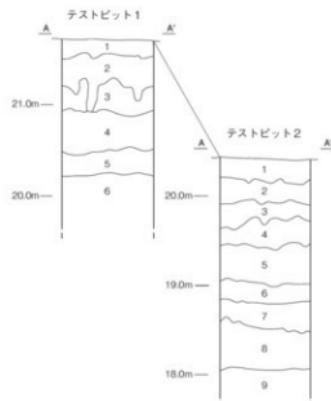
第6層は、黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりは強く、層厚は25~40cmである。

第7層は、明黄褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりは強く、層厚は20~32cmである。

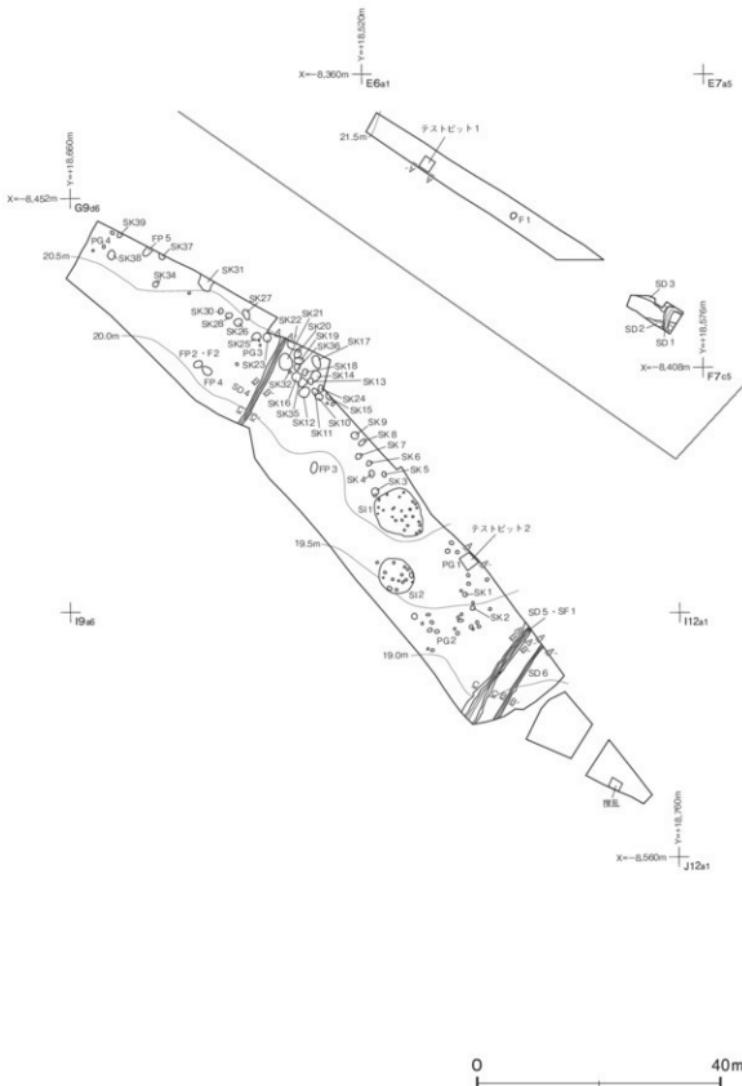
第8層は、明黄褐色を呈するハードローム層である。締まりは極めて強く、層厚は40~50cmである。

第9層は、明黄褐色を呈する常総粘土層への漸移層である。粘土ブロックを微量含み、粘性は極めて強い。下層が未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構は、第2層の上面で確認した。



第3図 基本土層図



第4図 遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡2棟、炉穴4基、炉跡2基、土坑29基を確認した。以下、遺構及び遺物について記述する。

(1) 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡（第5～8図）

位置 調査2区のH109区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径8.34m、短径7.19mの楕円形で、長径方向はN-25°-Wである。壁高は20～40cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、縁際まで踏み固められている。

ピット 26か所。P1～P3は径28～34cm、深さ37～50cmの円形で、いずれも主柱穴と考えられる。P4～P15は径25～34cm、深さ6～25cmの円形または楕円形で、配置から壁柱穴と考えられる。P16～P26は径21～36cm、深さ10～24cmの円形または楕円形で、性格は不明である。

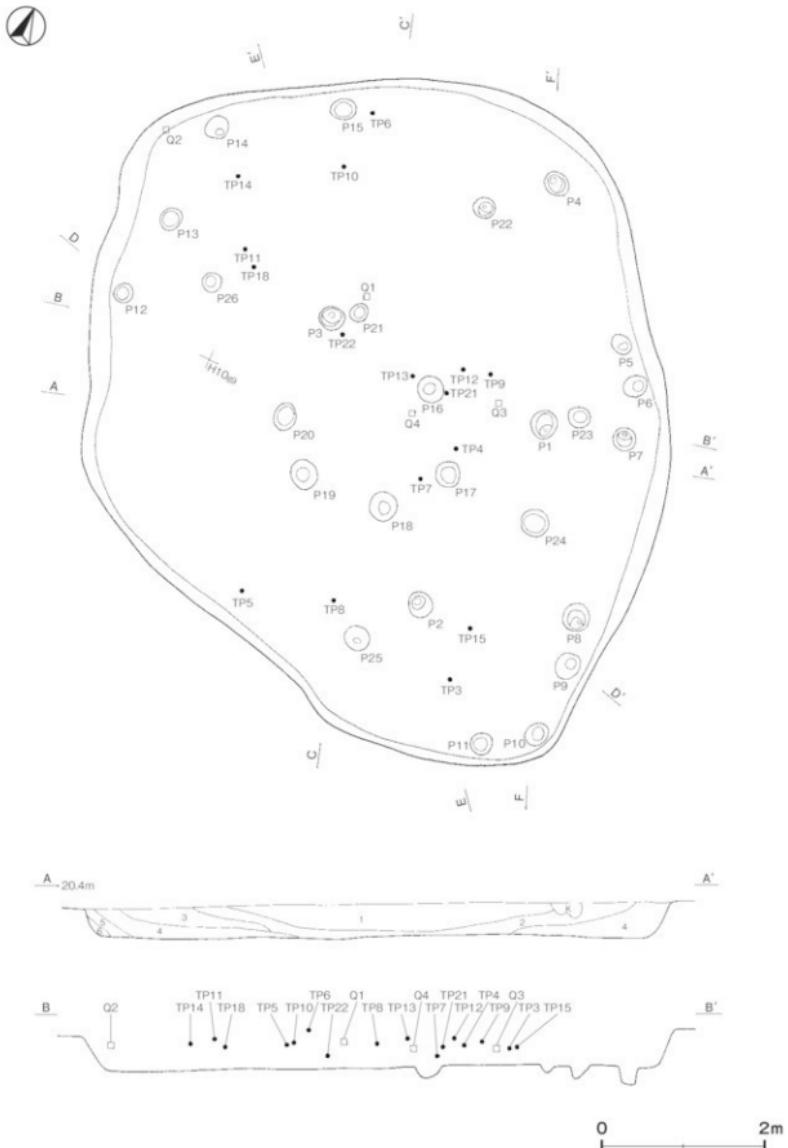
覆土 6層に分層できる。各層にロームブロックが多く含まれていることから埋め戻されている。

土層解説

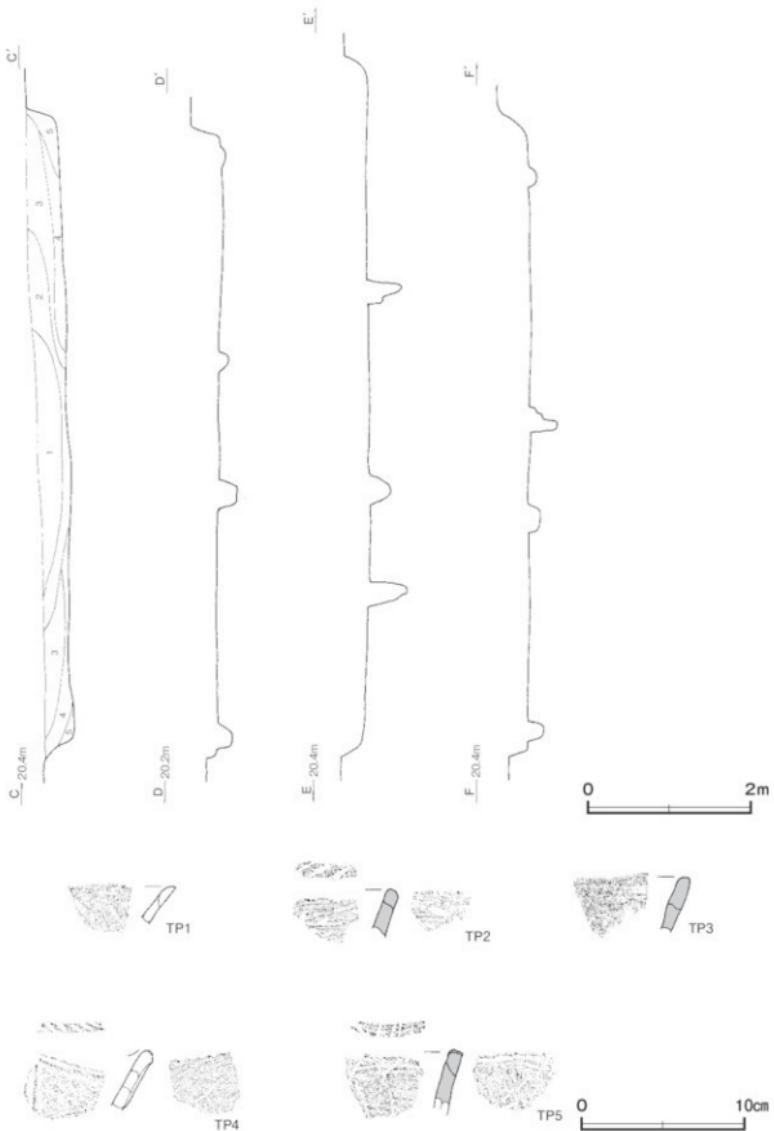
1 黒 色	ロームブロック中量	燒土粒子・炭化粒子微量	4 土 色	ロームブロック多量
2 黒 梅 色	ロームブロック中量		5 梅 色	ロームブロック中量
3 暗 梅 色	ロームブロック多量		6 黄 梅 色	ロームブロック多量

遺物出土状況 縄文土器片153点（深鉢）、石器4点（錐1、敲石2、石錘1）、剥片17点が出土している。縄文土器片は覆土中層から上層にかけて散在した状態で出土している。TP3・TP7・TP14・TP15・TP21・TP22・Q3・Q4は覆土中層、TP4・TP5・TP8～13・TP18・Q1・Q2は覆土上層、TP6は確認面からそれぞれ出土している。

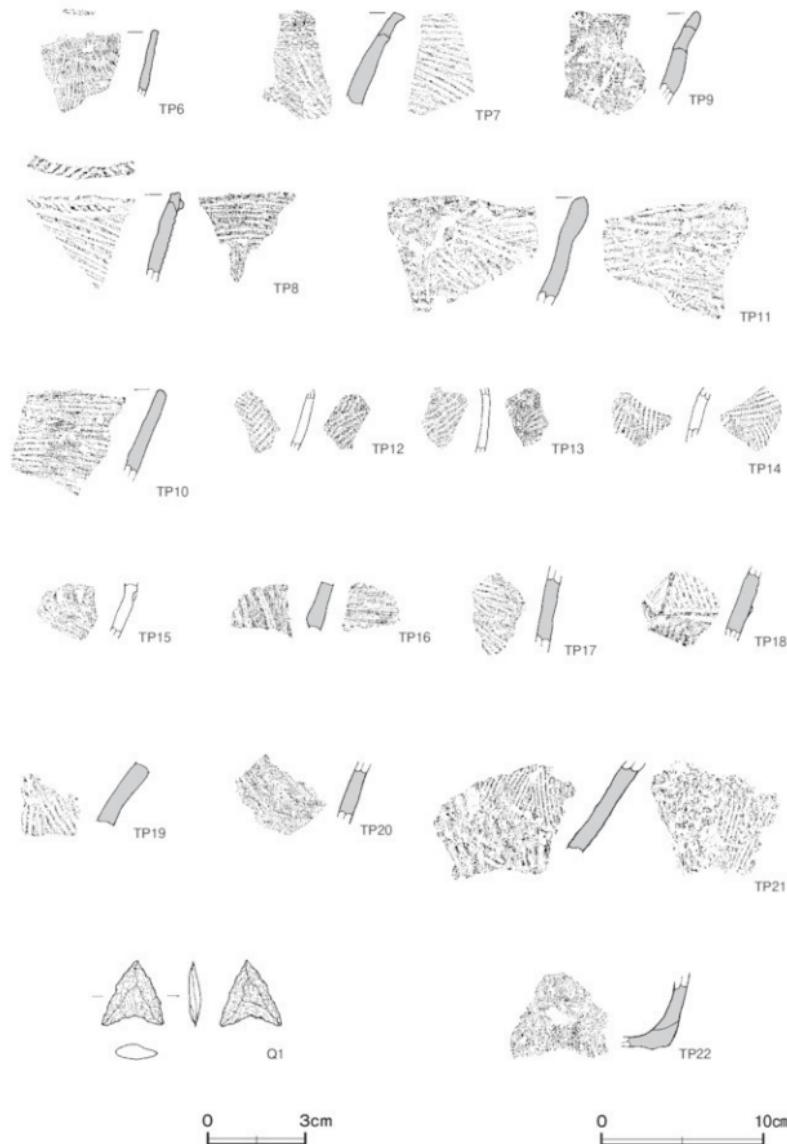
所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。



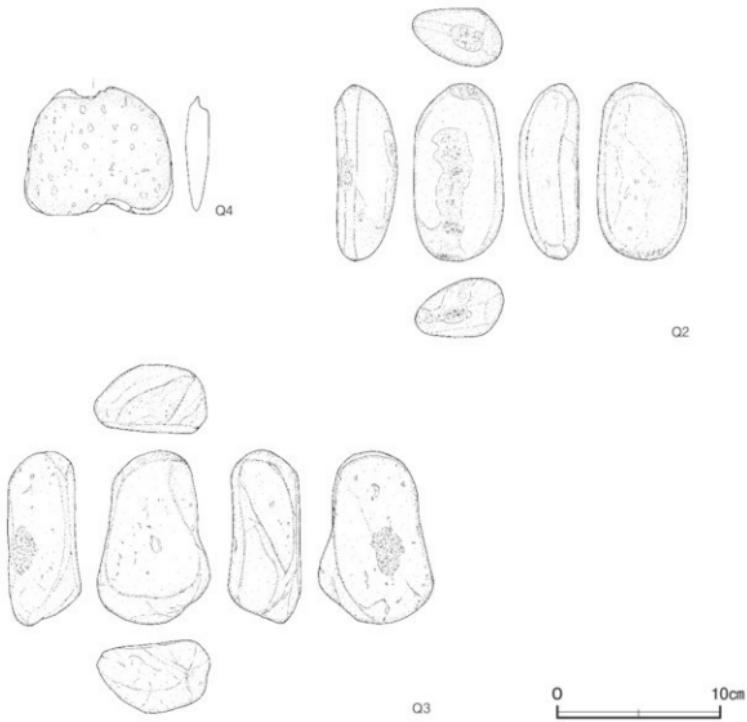
第5図 第1号竪穴建物跡実測図



第6図 第1号堅穴建物跡・出土遺物実測図



第7図 第1号竪穴建物跡出土遺物実測図(1)



第8図 第1号堅穴建物跡出土遺物実測図(2)

第1号堅穴建物跡出土遺物観察表(第6~8図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴ほか	出土位置	備考
TP 1	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	棕	普通	口部にキザミ	覆土中	
TP 2	陶文土器	深鉢	長石・石英・繊維	棕	普通	口部にキザミ 外・内面に条痕を施文後、外面ナデ	覆土中	
TP 3	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	褐灰	普通	口部肥厚	覆土中層	
TP 4	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	棕	普通	口部にキザミ 口縁部に隆起文 口縁部から腹部にかけて条痕文	覆土上層 PL 4	
TP 5	陶文土器	深鉢	長石・繊維	明赤褐	普通	口部にキザミ 外・内面に条痕文	覆土上層	PL 5
TP 6	陶文土器	深鉢	長石・繊維	明赤褐	普通	条痕文		確認用
TP 7	陶文土器	深鉢	長石・雲母・繊維	にぶい・黄棕	普通	口縁部を粗圧による肥厚 外・内面に条痕文 外面磨滅	覆土中層	PL 5
TP 8	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	灰黃褐	普通	口部にキザミ 外・内面に条痕文 内面ナデ	覆土上層	PL 4
TP 9	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	棕	普通	外面削成により調整不明瞭	覆土上層	
TP10	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	棕	普通	口縁部肥厚 条痕文	覆土上層	
TP11	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	にぶい・黄棕	普通	口縁部に粗圧によるナデ 外・内面に条痕文	覆土上層	
TP12	陶文土器	深鉢	長石・石英	赤褐	普通	外・内面に条痕文	覆土上層	PL 4
TP13	陶文土器	深鉢	長石・石英・雲母	赤褐	普通	外・内面に織文	覆土上層	

番号	種別	器種	胎土	色調	地成	手法の特徴	出土位置	備考
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英	に赤い網	普通	外・内面に縦文	覆土中層	PL 4
TP15	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	柔痕文 外面に斜突文	覆土中層	PL 5
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	淡黄	普通	外・内面に柔痕文	覆土中	
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	に赤い黄澄	普通	柔痕文	覆土中	
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	赤褐色	普通	微隆起縦文による区画 区画内に柔痕文	覆土上層	PL 4
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	灰褐色	普通	柔痕文	覆土中	
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	橙	普通	柔痕文 外面ナマ	覆土中	
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	橙	普通	柔痕文を施後、斜突文を施す	覆土中層	
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	橙	普通	柔痕文 磨減により調整不可能	覆土中層	PL 4

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 1	石歯	21	19	0.4	0.93	チャート	四基 両面調整 細かい連続する周辺調整を施す	覆土上層	PL 6
Q 2	敲石	109	56	37	3263	石英片岩	両端部を中心に瘤状の敲打痕	覆土上層	PL 6
Q 3	敲石	106	70	44	4283	チャート	側縁部に瘤状の敲打痕	覆土中層	
Q 4	石鍬	77	93	14	1456	石英片岩	両端部に抉り	覆土中層	PL 6

表2 第1号竪穴建物跡ピット計測表

番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)
P 1	37	P 7	25	P13	6	P19	18
P 2	50	P 8	23	P14	23	P20	14
P 3	45	P 9	22	P15	8	P21	19
P 4	14	P10	25	P16	15	P22	20
P 5	19	P11	23	P17	11	P23	18
P 6	13	P12	9	P18	24	P24	15

第2号竪穴建物跡（第9・10図）

位置 調査2区のH 10i9区、標高19mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径6.18m、短径5.26mの楕円形で、長径方向はN-61°-Wである。壁高は16~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、壁際まで踏み固められている。

ピット 14か所。P 1~P 3は径20~46cm、深さ30~46cmの円形または楕円形で、いずれも主柱穴と考えられる。P 14は長径68cm、短径52cm、深さ52cmの楕円形で、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 9~P 13は径36~84cm、深さ6~18cmの円形または楕円形で、配置から壁柱穴と考えられる。P 4~P 8は径34~46cm、深さ6~23cmの円形で、性格は不明である。

覆土 2層に分層できる。各層にロームブロックが含まれていることから埋め戻されている。

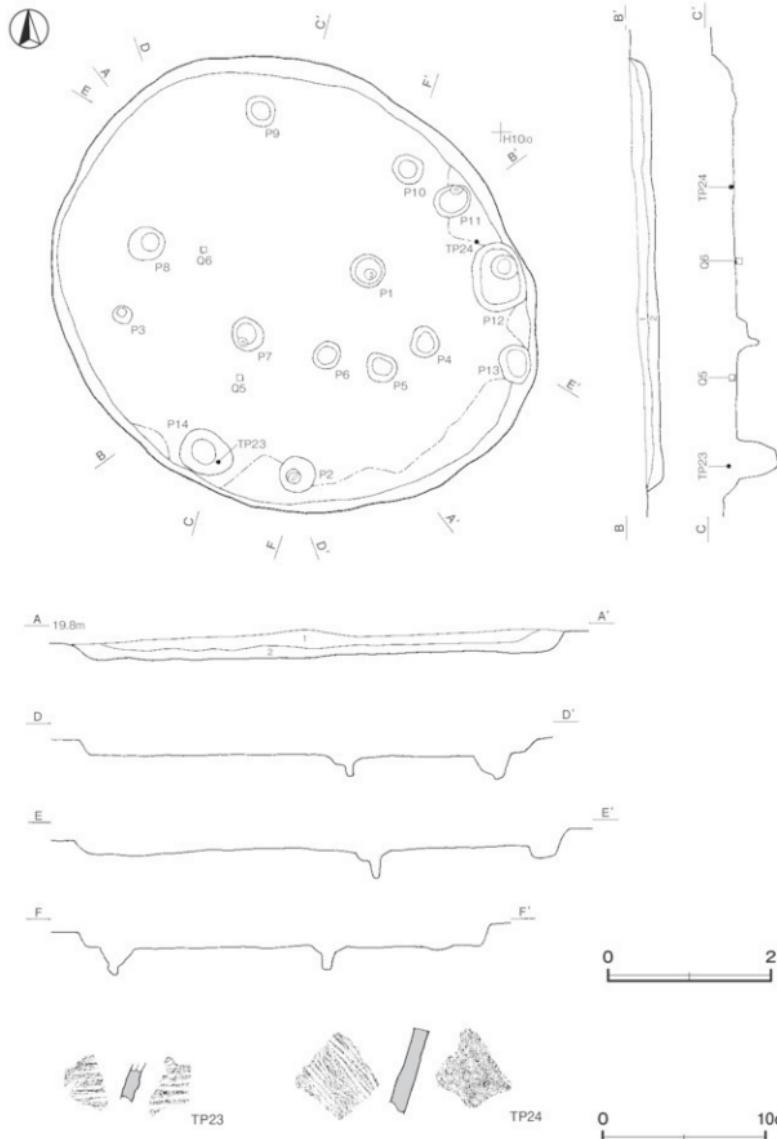
土層解説

1 層 色 ロームブロック少量

2 層 色 ロームブロック多量

遺物出土状況 縄文土器2点（深鉢）、剥片2点が出土している。Q 5・Q 6は覆土下層、TP23・TP24は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。



第9図 第2号堅穴建物跡・出土遺物実測図



第10図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図

第2号竪穴建物跡出土遺物観察表（第9・10図）

番号	種別	器種	船土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい黄橙	普通	外・内面に条痕を施文後、ナデ	覆土中層	
TP24	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	根	普通	外・内面に条痕文	覆土中層	
Q5	器種	長さ 幅 厚さ 重量	材質	一部欠損 縦長不整断片。			出土位置	備考
Q6	器種	64 23 0.6 5.95	頁岩	一部欠損 縦長不整断片。			覆土下層	

表3 第2号竪穴建物跡ピット計測表

番号	深さ(cm)								
P 1	30	P 4	6	P 7	23	P10	10	P13	17
P 2	32	P 5	15	P 8	14	P11	6	P14	52
P 3	46	P 6	10	P 9	7	P12	18		

表4 縄文時代竪穴建物跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	幾何			内 部 施 設	覆土	主な出土遺物	時 期	備 考
				長径×短径(m)	幅(m)	床面					
1	H 109	N - 25° - W	椭円形	8.34 × 7.19	20 ~ 40	ローム	3 - 32 II -	人為	縄文土器、石器、貝石、石器	早期後葉	
2	H 109	N - 61° - W	椭円形	6.18 × 5.26	16 ~ 28	ローム	3 1 5 5 -	人為	縄文土器、削片	早期後葉	

(2) 炉穴

第2号炉穴（第11図）

位置 調査2区北部のG 10j1区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

確認状況 第2号炉跡の覆土第6層上面に火床面を確認した。

規模と形状 長径138m、短径0.96mの楕円形で、長径方向N - 51° - Eである。火焚部は南西部に、足場は北東部に付設されている。火焚部は深さ14cm、炉床面は平坦で、火熱を受け赤変硬化している。足場は深さ20cmで、火焚部に向かってほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

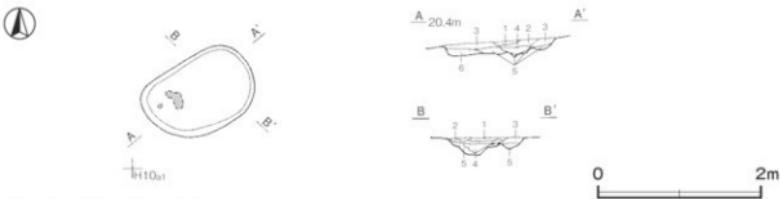
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。火床面は、第6層上面である。

土層解説

1	暗	褐色	ロームブロック中量
2	赤	褐色	焼土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量
3	褐	色	ローム粒子多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量
4	赤	褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量
5	褐	色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量
6	赤	褐色	焼土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 繩文土器片1点(深鉢)が出土している。土器は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土遺物から早期後葉と考えられる。



第11図 第2号炉穴実測図

第3号炉穴 (第12・13図)

位置 調査1区中央部のH 10d5区、標高20 mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径192 m、短径0.86 mの楕円形で、長径方向はN - 18° - Eである。火焚部は北部に、足場は南部に付設されている。火焚部は深さ8 cm、炉床面は平坦で、火熱を受けて赤変硬化している。足場は深さ20 cmで、火焚部に向かって緩やかに下っている。壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

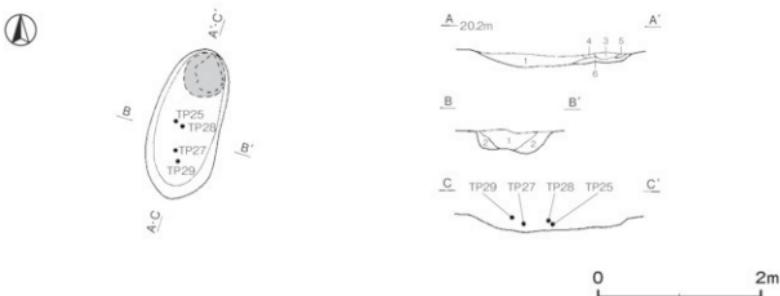
覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。火床面は、第6層上面である。

土層解説

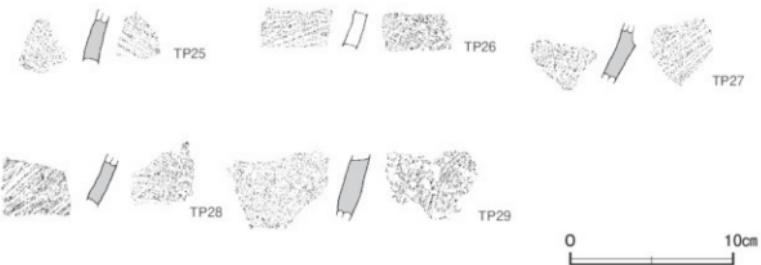
1	黒	色	ロームブロック多量
2	暗	褐色	ロームブロック中量
3	褐	色	ロームブロック中量
4	赤	褐色	ローム粒子・焼土粒子多量
5	明	褐色	ロームブロック中量
6	赤	褐色	焼土ブロック多量

遺物出土状況 繩文土器片8点(深鉢)が出土している。TP25・TP27は覆土中層、TP28・TP29は覆土上層、TP26は覆土中からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。



第12図 第3号炉穴実測図



第13図 第3号炉穴出土遺物実測図

第3号炉穴出土遺物観察表（第13図）

番号	種別	器種	胎土	色調	施成	文様の特徴はか	出土位置	備考
TP25	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・鐵磁	にぶい橙	普通	外・内面に条痕文 外面磨滅により調整不明瞭	覆土中層	
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	橙	普通	条痕文 磨滅により調整不明瞭	覆土中	
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・鐵磁	にぶい橙	普通	外・内面に条痕文	覆土中層	
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・鐵磁	橙	普通	外・内面に条痕文	覆土中層	
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・鐵磁	橙	普通	無文	覆土中層	

第4号炉穴（第14図）

位置 調査2区北部のG101区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸158m、短軸122mの隅丸長方形で、長軸方向はN-49°Wである。火焚部は南東部に、足場は北西部に付設されている。火焚部は深さ40cm、炉床面は皿状で、火熱を受けて赤変硬化している。足場は深さ26cmで、火焚部に向かって段をなして下がっている。壁の南東側は直立し、それ以外は外傾して立ち上がっている。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。火床面は、第6層上面である。

土層解説

- | | | | | |
|-------|------------------|--------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量 | 燒土粒子微量 | 5 明褐色 | ローム粒子多量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック中量 | | 6 赤褐色 | 燒土ブロック多量、黒色土ブロック中量、ローム |
| 3 黒褐色 | 燒土粒子多量、ロームブロック中量 | | | 粒子、炭化粒子微量 |
| 4 橙褐色 | ローム粒子多量 | | | |

所見 時期は、出土遺物はないが、他の炉穴と同様の形状であることから早期後葉と考えられる。



第14図 第4号炉穴実測図

第5号炉穴（第15図）

位置 調査2区北部のG99区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 東部が調査区域外へ延びているため、長径は308mしか確認できなかった。短径は1.86mで梢円形で、長径方向はN-48°-Eである。火焚部は南西部（火焚部A）と北東部（火焚部B）の2か所を確認した。足場及び、火焚部A・Bの新旧関係は不明である。火焚部Aは深さ14cm、炉床面は皿状で、火熱を受けて赤変硬化している。火焚部Bは深さ14cm、炉床面は皿状で、火熱を受けて赤変硬化している。壁は外傾して立ち上がっている。

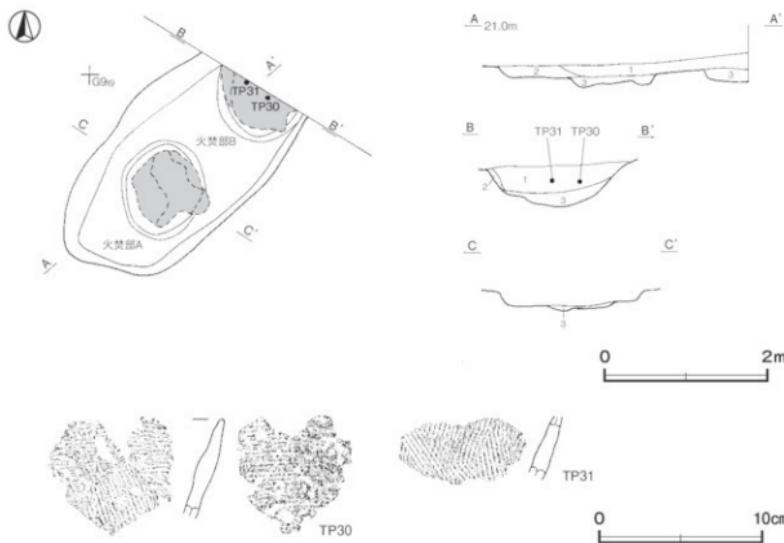
覆土 2層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。火床面は、第3層上面である。

土層解説

1 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	3 赤褐色	ロームブロック多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量
2 黄褐色	ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子微量		

遺物出土状況 繩文土器片3点（深鉢）が出土している。TP30・TP31は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。



第15図 第5号炉穴・出土遺物実測図

第5号炉穴出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP30	縄文土器	深鉢	長石・雲母	褐	普通	外・内面に柔痕文	覆土中層	
TP31	縄文土器	深鉢	長石	褐	普通	柔痕文	覆土中層	

表5 繩文時代炉穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		火焚部	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考 重複関係(旧→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
2	G 10j	N - 51° - E	楕円形	1.38 × 0.96	14	平坦	外傾	人為		本跡→F 2
3	H 10d5	N - 18° - E	楕円形	1.92 × 0.86	8	平坦	緩斜	人為	縄文土器	
4	G 10j	N - 49° - W	楕丸長方形	1.58 × 1.22	40	盤状	外傾・直立	人為		
5	G 9f9	N - 48° - E	【楕円形】 (3.08) × 1.86	14 - 14		盤状	外傾	人為	縄文土器	

(3) 炉跡

第1号炉跡（第16図）

位置 調査1区中央部のE 617区、標高21mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.18m、短径1.00mの楕円形で、長径方向はN - 51° - Wである。底面は凹凸で、10cm掘り込まれ、壁は緩やかに傾斜して立ち上がっている。

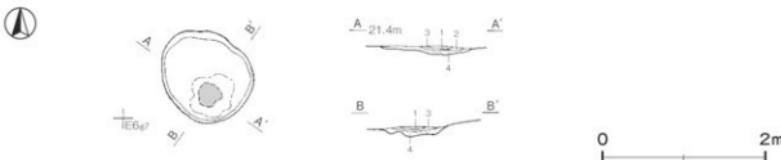
覆土 4層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。火床面は、第1層上面であり、火熱を受けて赤変硬化している。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------|
| 1 赤褐色 | 燒土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 3 紫褐色 | ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 紫褐色 | ロームブロック・燒土ブロック多量、炭化粒子微量 | 4 紫褐色 | 燒土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 縄文土器片2点（深鉢）が出土している。土器は細片のため、図示できなかった。

所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。



第16図 第1号炉跡実測図

第2号炉跡（第17図）

位置 調査2区北部のG 10j1区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.38m、短径0.96mの楕円形で、長径方向N - 51° - Eである。底面は平坦で、20cm掘り込まれ、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層できる。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。火床面は、第2層上面であり、火熱を受けて赤変硬化している。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------------------|
| 1 紫褐色 | ロームブロック中量 | 4 赤褐色 | 燒土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 赤褐色 | 燒土ブロック中量、ロームブロック・炭化物微量 | 5 紫褐色 | ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 紫褐色 | ローム粒子多量、燒土粒子中量、炭化粒子少量 | 6 赤褐色 | 燒土ブロック多量、ローム粒子・炭化粒子微量 |

所見 時期は、出土遺物はないが、他の炉跡と同様の形状であることから早期後葉と考えられる。



第17図 第2号炉跡実測図

表6 繩文時代炉跡一覧表

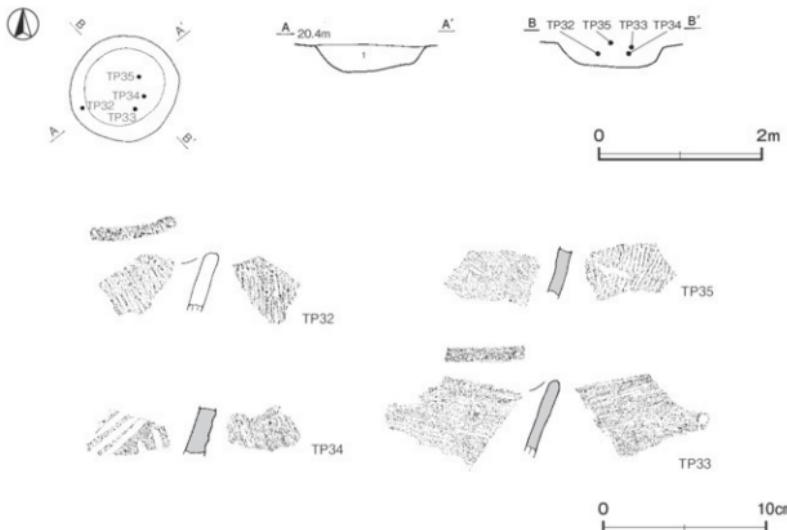
番号	位置	長径方向	平面形	規 模		火焚部	壁 面	覆 土	主な出土遺物	施 工 者 重複開拓(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	E 677	N - 51° - W	椭円形	1.18 × 1.00	18	凹凸	緩斜	人為	縄文土器	
2	G 1031	N - 51° - E	椭円形	1.38 × 0.96	20	平坦	外傾	人為		FP 2 → 本跡

(4) 土坑

今回の調査で、土坑 29 基を確認した。そのうち 6 基については文章で記述し、その他の土坑については、実測図と一覧表を掲載する。

第9号土坑（第18図）

位置 調査 2 区の H 10c7 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。



第18図 第9号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 長径 136 m、短径 128 m の円形である。深さは 28 cm で、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒 土 色 ロームブロック少量

遺物出土状況 繩文土器片 13 点（深鉢）が出土している。TP32・TP34 は覆土中層、TP33・TP35 は覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。性格は不明である。

第 9 号土坑出土遺物観察表（第 18 図）

番号	種 別	器種	胎 土	色 調	地成	文 標 の 符 記 は か	出土位置	備 考
TP32	縄文土器	深鉢	長石・石英	棕	普通	外・内面に条痕文	覆土中層	
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英・楕圓	黄棕	普通	条痕を施文後、ナデ	覆土上層	
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英・青母・楕圓	明赤褐	普通	条痕文・沈綴文	覆土中層	PL. 4
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英・青母・楕圓	棕	普通	外・内面に条痕文 外面ナデ	覆土上層	

第 10 号土坑（第 19 図）

位置 調査 2 区の H 10b6 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

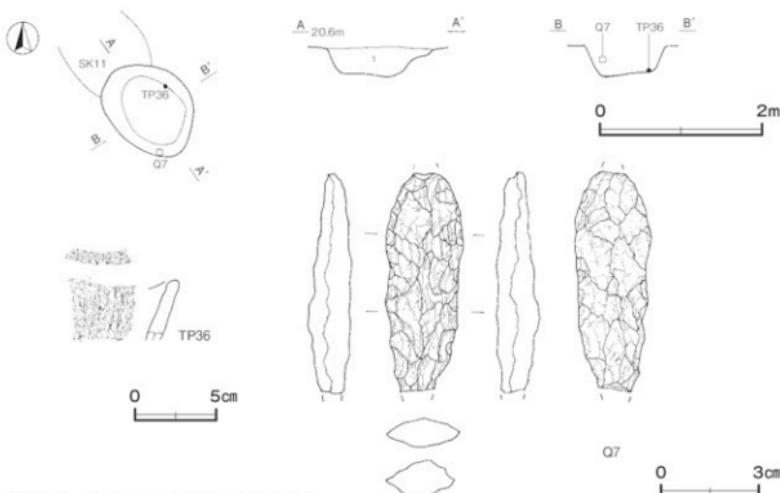
重複関係 第 11 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長径 118 m、短径 100 m の梢円形で、長径方向は N - 64° - W である。深さは 36 cm で、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒 土 色 ロームブロック少量



第 19 図 第 10 号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 繩文土器片5点（深鉢）、石器1点（有舌尖頭器）が出土している。TP36は覆土下層、Q7は覆土中層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。性格は不明である。

第10号土坑出土遺物観察表（第19図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP36	縄文土器	深鉢	長石・雲母	灰	普通	波頭部から垂下する沈縄文	覆土下層	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置
Q7	有舌尖頭器	(68)	24	14	(208)	安山岩	凸基 両面調整 両面中央に棱 一部欠損	覆土中層 PL.6

第11号土坑（第20図）

位置 調査2区のH 10b5区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第10号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南部を第10号土坑に掘り込まれているため、短径は0.94mで、長径は1.08mしか確認できなかった。平面形は楕円形で、長径方向はN-43°-Wである。深さは36cmで、底面はほぼ平坦である。壁は直立している。

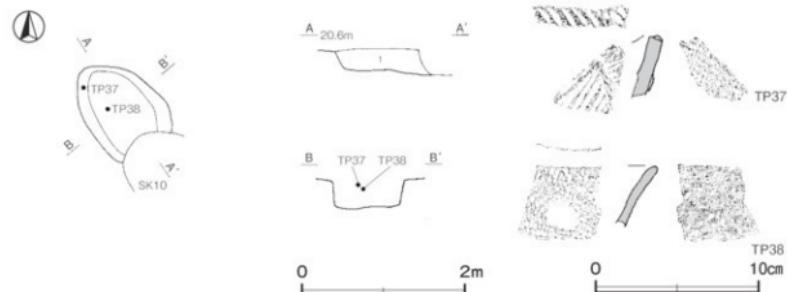
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 縄文土器片12点（深鉢）が出土している。TP38は覆土中層、TP37は覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。性格は不明である。



第20図 第11号土坑・出土遺物実測図

第11号土坑出土遺物観察表（第20図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP37	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にふい黄橙	普通	口部にキザミ 外面に段階縄文による区画 区画内に朱	覆土上層	PL.4
TP38	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・繊維	にふい黄橙	普通	口部にキザミ	覆土中層	

第 17 号土坑（第 21 図）

位置 調査 2 区の G 10j6 区、標高 20 m ほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 南部が搅乱を受けているため、短径は 1.24 m、長径は 1.68 m しか確認できなかつたが、楕円形で、長径方向は N - 34° - W である。深さは 14 cm で、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

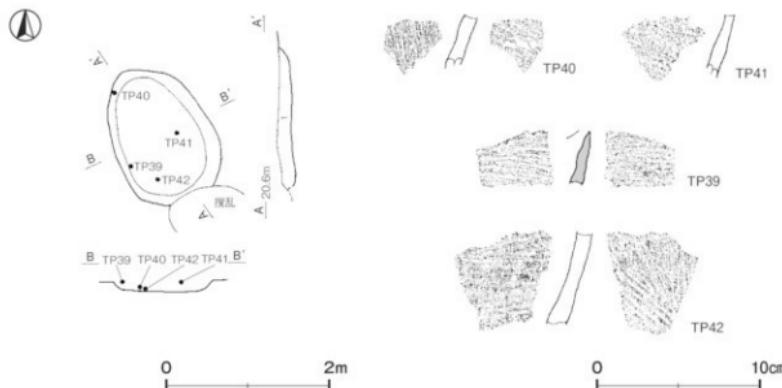
覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

1 黒 樹 色 ロームブロック少量、燒土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 繩文土器片 9 点（深鉢）が出土している。TP40・TP42 は覆土下層、TP39・TP41 は覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。性格は不明である。



第 21 図 第 17 号土坑・出土遺物実測図

第 17 号土坑出土遺物観察表（第 21 図）

番号	種 別	器種	胎 土	色 調	地成	文 種 の 特 徴 は か	出土位置	備 考
TP39	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・鐵鐵	棕	普通	液状口縁部 外・内面に条痕文	覆土上層	
TP40	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	棕	普通	外・内面に条痕文 ナデ	覆土下層	
TP41	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	棕	普通	外・内面に条痕文 ナデ	覆土上層	
TP42	縄文土器	深鉢	長石・石英	棕	普通	外・内面に条痕文 ナデ	覆土下層	

第 19 号土坑（第 22 図）

位置 調査 2 区の G 10j5 区、標高 20 m ほどの台地縁辺部に位置している。

規模と形状 西壁が搅乱を受けているが、長軸 1.86 m、短軸 0.86 m の隅丸長方形で、長軸方向は N - 89° - W である。深さ 16 cm で、底面は平坦である。東壁際に径 22 cm で、深さ 42 cm のピット状の掘り込みを確認した。壁は外傾して立ち上がっている。

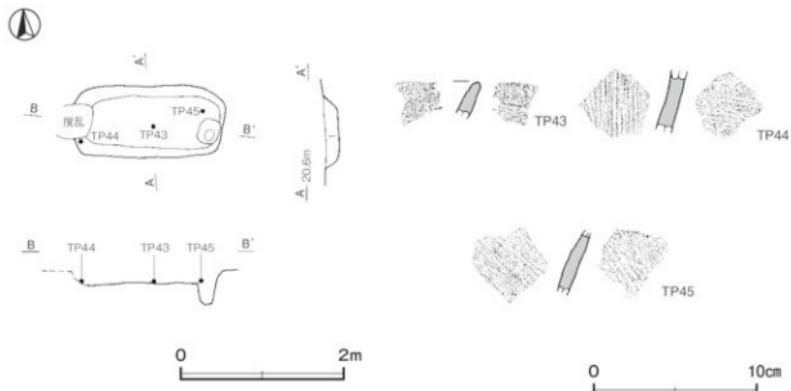
覆土 単一層である。堆積状況から、埋め戻されている。

土層解説

1 黒 樹 色 ローム粒子多量

遺物出土状況 繩文土器片8点(深鉢)が出土している。TP43～TP45は覆土下層からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。性格は不明である。



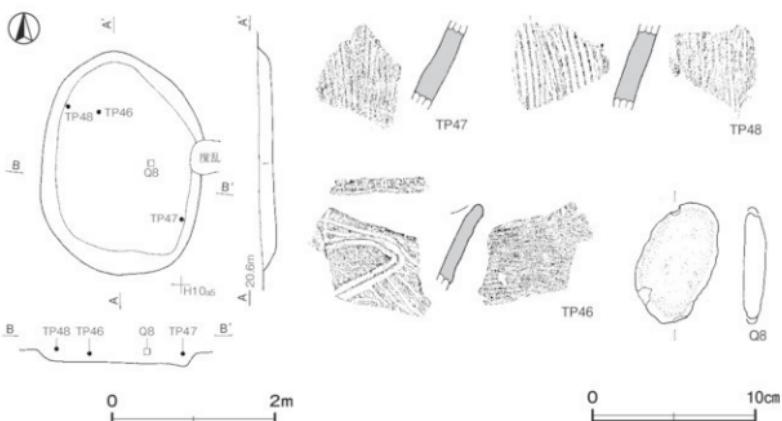
第22図 第19号土坑・出土遺物実測図

第19号土坑出土遺物観察表(第22図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴は	出土位置	備考
TP43	縄文土器	深鉢	長石・鐵鉱	にぶい黄橙	普通	外・内面に柔軟文 ナデ	覆土下層	
TP44	縄文土器	深鉢	長石・石英・鐵鉱	棕	普通	外・内面に柔軟文 ナデ	覆土下層	
TP45	縄文土器	深鉢	長石・石英・鐵鉱	にぶい黄橙	普通	外・内面に柔軟文 ナデ	覆土下層	

第21号土坑(第23図)

位置 調査2区のG 10j4区、標高20mほどの台地平坦部に位置している。



第23図 第21号土坑・出土遺物実測図

規模と形状 長径 280 m、短径 2.00 m の梢円形で、長径方向は N - 2° - W である。深さは 16 cm で、底面はほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 単一層である。ロームブロックが含まれていることから、埋め戻されている。

土層解説

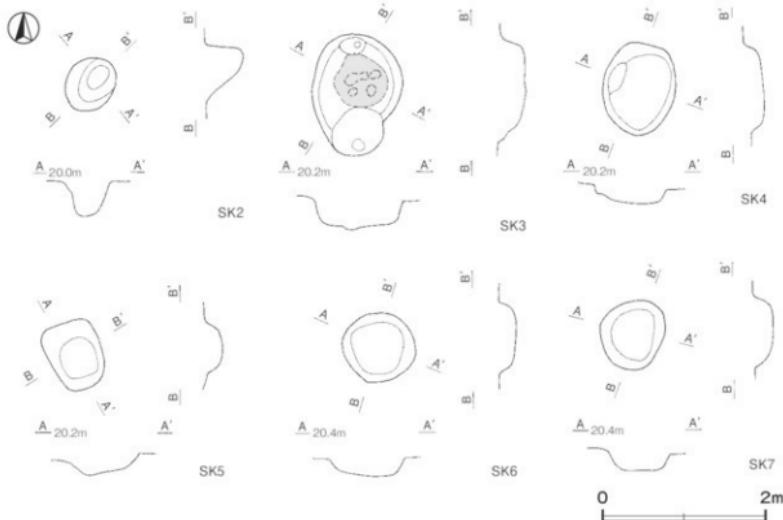
1 黒褐色 ロームブロック中量、燒土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 繩文土器片 13 点（深鉢）、石器 1 点（石錐）が出土している。TP46 は覆土中層、TP47・TP48・Q 8 は覆土上層からそれぞれ出土している。

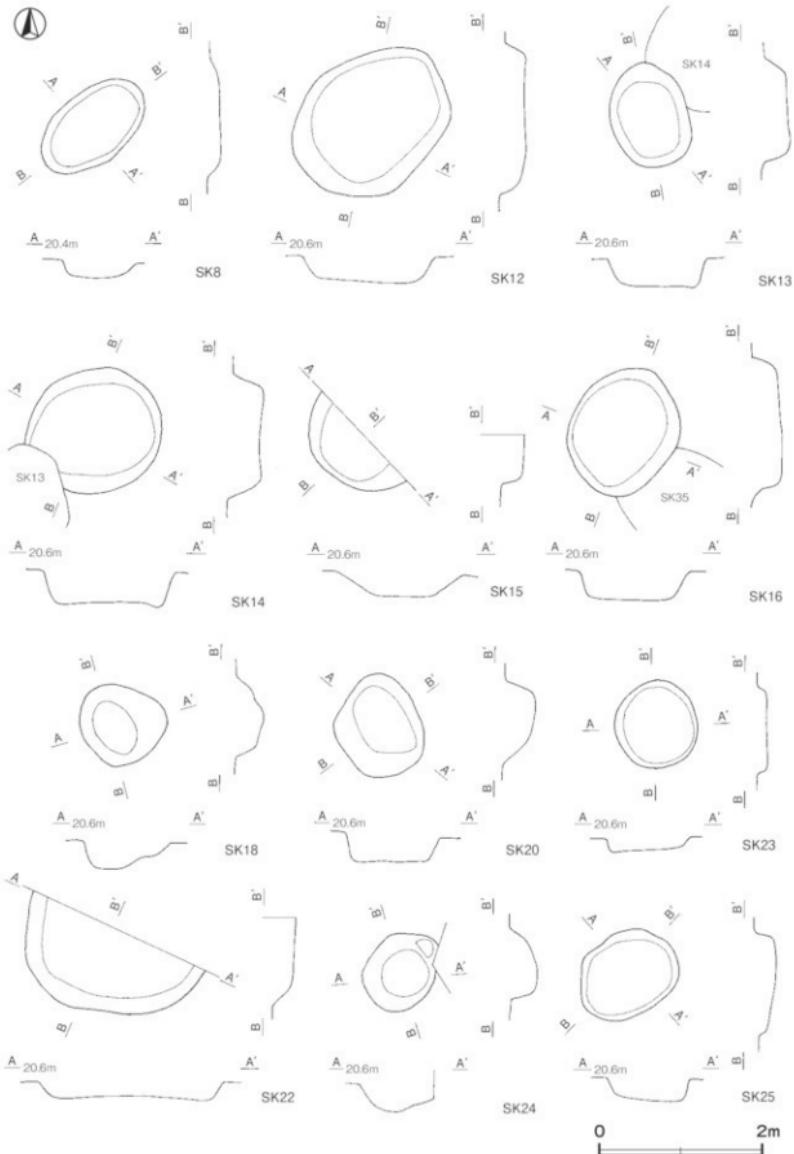
所見 時期は、出土土器から早期後葉と考えられる。性格は不明である。

第 21 号土坑出土遺物観察表（第 23 図）

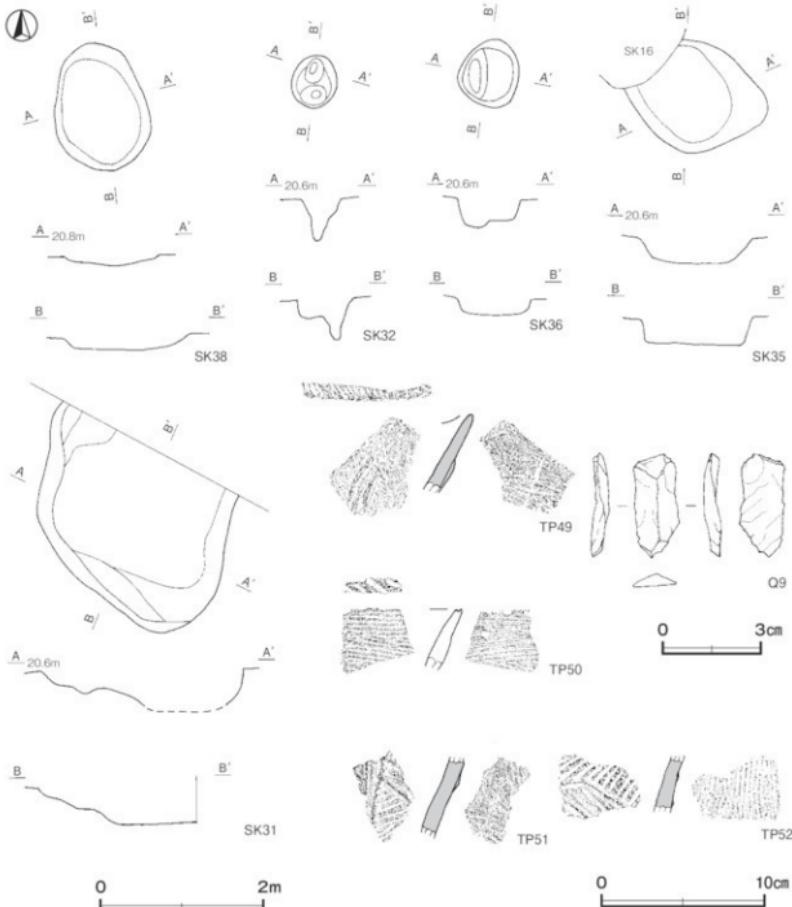
番号	種別	器種	胎土	色調	施成	文様の特徴はか	出土位置	備考
TP46	縄文土器	深鉢	長石・繊維	にぶい黄褐	普通	外・内面に条痕文 ナデ	覆土中層	PL 5
TP47	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	褐	普通	外・内面に条痕文 ナデ	覆土上層	PL 5
TP48	縄文土器	深鉢	長石・石英・繊維	にぶい黄褐	普通	外・内面に条痕文 ナデ	覆土上層	PL 5
Q 8	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置 備考
Q 8	石錐	75	52	14	70.87	石英斑岩	側縁部に抉り	覆土上層



第 24 図 縄文時代その他の土坑実測図（1）



第25図 繩文時代その他の土坑実測図（2）



第26図 縄文時代その他の土坑出土遺物実測図

縄文時代のその他の土坑出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP49	縄文土器	深鉢	長石・石英・構造	棕	普通	口唇部にキザミ、外面に微隆起縦文による区画	SK12 覆土中	PL. 4
TP50	縄文土器	深鉢	長石・石英	褐灰	普通	口唇部にキザミ、外・内面に条痕文	SK14 覆土中	PL. 5
TP51	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・構造	棕	普通	内面に条痕を施文後、ナデ、微隆起縦文による区画	SK24 覆土中	PL. 5
TP52	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母・構造	棕	普通	内面に条痕を施文後、ナデ、外面に微隆起縦文で区画	SK25 覆土中	PL. 5

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 9	調片	32	14	0.4	1.63	安山岩	細長調片	SK35 覆土中	

表7 繩文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		底面	壁面	覆土	主な出土遺物	備 考 重複関係(山→渓)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
2	H 11g	N - 48° - E	楕円形	0.70 × 0.60	45	皿状	直立・外傾	人為	縄文土器	
3	H 10g	N - 1° - W	楕円形	1.50 × 1.12	36	平坦	外傾	人為	縄文土器	
4	H 10e8	N - 10° - E	楕円形	1.12 × 0.90	20	平坦	外傾	人為	縄文土器	
5	H 10e8	N - 26° - W	不整楕円形	0.86 × 0.68	20	皿状	外傾	人為	縄文土器	
6	H 10d8	-	円形	0.94 × 0.86	24	皿状	外傾	人為	縄文土器	
7	H 10d7	N - 23° - E	椭円形	0.90 × 0.76	24	平坦	外傾	人為	縄文土器	
8	H 10c7	N - 50° - E	椭円形	1.50 × 0.88	20	平坦	外傾	人為	縄文土器	
9	H 10c7	-	円形	1.36 × 1.28	28	平坦	外傾	人為	縄文土器	
10	H 10b6	N - 64° - W	椭円形	1.18 × 1.00	36	平坦	外傾	人為	縄文土器、有舌尖頭器	SK11 → 本跡
11	H 10b5	N - 43° - W	〔椭円形〕	(1.08) × 0.94	36	平坦	直立	人為	縄文土器	本跡 → SK10
12	H 10a5	N - 40° - E	椭円形	2.08 × 1.65	34	平坦	外傾	人為	縄文土器	
13	H 10a5	N - 14° - W	椭円形	1.28 × 0.92	32	平坦	外傾	人為	縄文土器	SK14 → 本跡
14	H 10a6	-	円形	1.60 × 1.58	44	平坦	外傾	人為	縄文土器	本跡 → SK13
15	H 10b6	N - 40° - W	〔椭円形〕	1.52 × (0.58)	26	平坦	外傾	人為	縄文土器	
16	H 10a5	N - 18° - E	椭円形	1.62 × 1.32	36	平坦	外傾	人為	縄文土器	SK35 → 本跡
17	G 10b6	N - 34° - W	〔椭円形〕	(1.68) × 1.24	14	平坦	外傾	人為	縄文土器	
18	H 10a5	-	不整円形	1.04 × 1.02	34	有段	外傾	人為	縄文土器	
19	G 10b5	N - 89° - W	椭丸長方形	1.86 × 0.86	16・42	平坦	外傾	人為	縄文土器	
20	G 10b5	N - 26° - W	椭円形	1.22 × 1.04	36	平坦	外傾	人為	縄文土器	
21	G 10b4	N - 2° - W	椭円形	2.80 × 2.00	16	平坦	外傾	人為	縄文土器、石錐	
22	G 10b5	N - 64° - W	〔椭円形〕	2.32 × (1.06)	28	平坦	縦斜	人為	縄文土器	
23	G 10b4	-	円形	1.08 × 1.00	18	平坦	外傾	人為	縄文土器	
24	H 10a6	N - 58° - E	〔椭円形〕	(1.00) × 0.86	33	皿状	外傾・横斜	人為	縄文土器	
25	G 10b2	N - 48° - E	椭円形	1.28 × 1.00	26	平坦	外傾	人為	縄文土器	
31	G 10g1	N - 62° - W	〔椭丸方形容〕	2.44 × (1.94)	46	有段	縦斜	自然	縄文土器	
32	H 10a5	N - 9° - E	椭円形	0.64 × 0.56	20・52	有段	外傾・横斜	人為	縄文土器	
35	H 10a5	N - 47° - E	〔不整椭円形〕	1.32 × (1.28)	32	平坦	縦斜	人為	縄文土器、網片	本跡 → SK16
36	G 10b5	N - 13° - W	椭円形	0.90 × 0.72	34	有段	外傾	人為	縄文土器	
38	G 9b7	N - 10° - W	椭円形	1.60 × 1.18	18	平坦	縦斜	人為	縄文土器	

2 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期や性格が明らかでない道路跡 1 条、溝跡 6 条、土坑 8 基、ピット群 4 か所を確認した。そのうち、道路跡 1 条、溝跡 1 条、及びピット群 4 か所については文章で記述し、それ以外については、実測図と一覧表を掲載する。

(1) 道路跡

第 1 号道路跡

位置 調査 2 区南部の I 11a4 ~ I 11d2 区、標高 19 m の台地縁辺部に位置している。

確認状況 第 5 号溝跡の覆土第 6・7 層の上面で確認した。

規模と構造 I 11a4 区から南西方向 (N - 37° - E) へ直線的に延び、I 11d2 区で硬化した面が認められなくなったため、長さ 12.9 m しか確認ができなかった。規模は幅 40 ~ 102 cm で、堆積土の厚さは 10 ~ 26 cm である。断面は逆台形で、壁は緩やかに立ち上がっていている。

所見 時期は、出土遺物がないため、不明である。第 5 号溝跡に土砂が堆積した段階で、道路として利用されたものと考えられる。

(2) 溝跡

第 5 号溝跡 (第 27 図)

位置 調査 2 区南部の I 11a4 ~ I 11e2 区、標高 18 ~ 19 m の台地縁辺部に位置している。

規模と形状 両端が調査区域外へ延びているため、長さは 17.5 m しか確認できなかった。I 11a4 区から南西方向 (N - 37° - E) へ直線的に延びている。規模は上幅 114 ~ 300 cm、下幅 4 ~ 50 cm で、深さは 50 cm である。断面は逆台形で、壁は緩やかに立ち上がっていている。底面は北東部から南西部へ向かって 1.5 m ほど下っている。

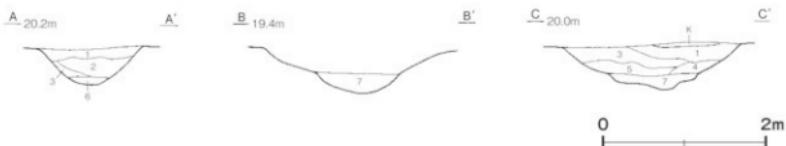
覆土 7 層に分層できる。第 1 ~ 5 層はブロック状の堆積状況から、埋め戻されている。第 6・7 層は自然堆積で、それぞれ上面が硬化しており、第 1 号道路跡として利用された。

土層解説

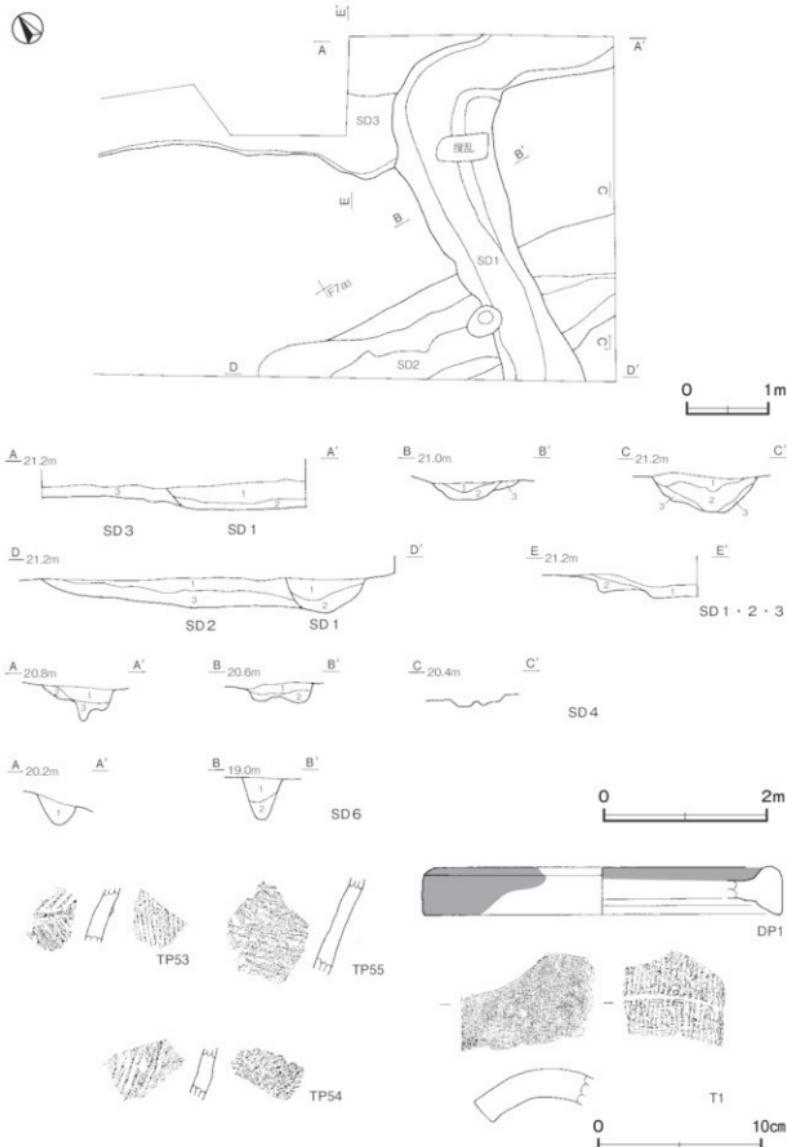
1 黒褐色	ローム粒子微量
2 極暗褐色	ローム粒子少量
3 暗褐色	ローム粒子少量
4 黒褐色	ローム粒子少量

5 極暗褐色	ロームブロック少量
6 暗褐色	ロームブロック少量、炭化粒微量
7 暗褐色	ロームブロック少量

所見 時期は、出土遺物がないため、不明である。本跡と並走している第 6 号溝跡は、北東部から南西部へ向かって 1.2 m ほど下っているが、ともに性格は不明である。



第 27 図 第 5 号溝跡実測図



第28図 その他の溝跡・出土遺物実測図

第1号溝跡土層解説

- 1 黒 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック中量、炭化物・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量

第2号溝跡土層解説

- 1 黒 色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黑褐色 ロームブロック多量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黑褐色 ロームブロック多量

第3号溝跡土層解説

- 1 黑褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

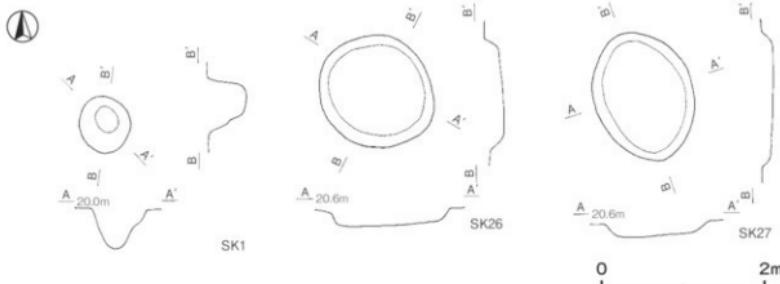
その他の溝跡出土遺物観察表（第28図）

番号	種別	器種	胎 土		色 調	焼成	文様の特徴			出土位置	備考	
			長	幅			文	様	の特徴			
TP53	縄文土器	深鉢	長石・雲母		明赤褐色	普通	外・内面に柔軟な風乾後、外面に微隆起紋で区画	外面の一部と内面にテグ		SD 4 覆土中		
TP54	縄文土器	深鉢	長石・石英		暗灰	普通	外・内面に柔軟な			SD 4 覆土中		
TP55	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母		明赤褐色	普通	外面上にテグ			SD 4 覆土中		
番号	種別	最大径	口径	器高	重量	胎 土・色 調	特 徵			出土位置	備考	
DP 1	五輪。	(220)	—	30	(0.19)	長石・石英	に赤褐色	保付着		SD 6 覆土中		
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	焼 成	特 徵			出土位置	備考
T 1	残瓦	(6.2)	(7.3)	17	(847)	長石	良好	角の剥取り			SD 6 覆土中	

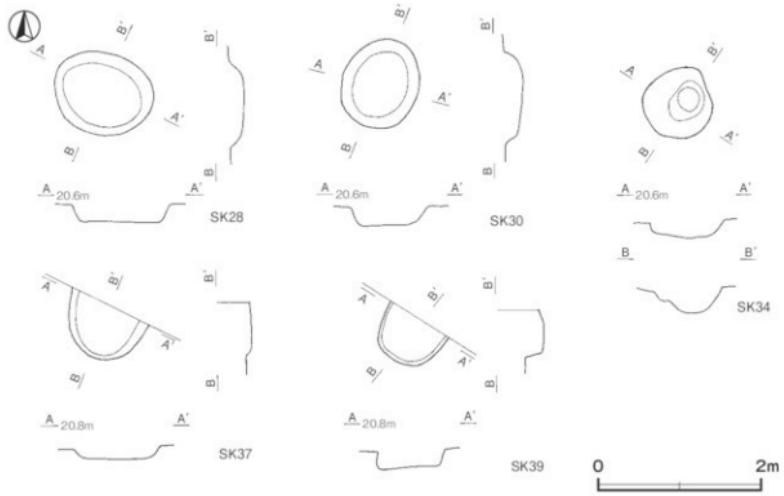
表8 その他の溝跡一覧表

番号	位 置	方 向	平面形	規 模				断 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	深さ (cm)					
1	E 7.33 - F 7.33	N - 84° - W	[L字形]	54	0.72 - 1.28	0.34 - 0.60	40	U字状	弱傾 緩斜	人為		SD 2・3→本路
2	E 7.22 - F 7.33	N - 82° - W	[直線]	35	1.26 - 1.96	0.28 - 0.48	42	U字状	緩斜	人為		本路→SD 1
3	E 7.22 - F 7.33	N - 70° - W	[直線]	(5.0)	(1.70)	(0.40)	30	逆台形	外傾	人為		本路→SD 1
4a	G 104 - H 104a	N - 23° - E	[直線]	9.8	0.36 - 0.64	0.10 - 0.20	20	[U字状]	緩斜	人為	縄文土器	4bとの新旧関係不明
4b	G 104 - H 104b	N - 23° - E	[直線]	9.8	0.18 - 0.46	0.08 - 0.20	24	[U字状]	緩斜	人為	縄文土器	4aとの新旧関係不明
5	I 11a4 - I 11e2	N - 37° - E	直線	17.5	1.14 - 2.00	0.04 - 0.50	50	逆台形	緩斜	人為		本路→SF 1
6	I 11b5 - I 11e3	N - 34° - E	直線	13.8	0.30 - 0.78	0.10 - 0.20	50	逆台形	外傾	人為	土製品、瓦片	

(3) 土坑(第29・30図)



第29図 その他の土坑実測図（1）



第30図 その他の土坑実測図（2）

表9 その他の土坑一覧表

番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		底 面	壁 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径 × 短径 (m)	深さ (cm)					
1	H 11g2	N - 15° - W	楕円形	0.70 × 0.60	48	圓状	外傾	人為		
26	G 102	N - 55° - W	楕円形	1.50 × 1.34	20	平坦	板鈎	人為		
27	G 103	N - 17° - W	楕円形	1.64 × 1.22	18	平坦	板鈎	人為		
28	G 102	N - 67° - W	楕円形	1.24 × 1.02	18	平坦	板鈎	人為		
30	G 102	N - 24° - E	楕円形	1.12 × 0.94	23	平坦	板鈎	人為		
34	G 9g9	-	円形	0.94 × 0.86	30	有段	板鈎	人為		
37	G 9g9	N - 64° - W	〔楕円形〕	1.04 × 0.68	14	平坦	板鈎	人為		
39	G 9e8	N - 58° - W	〔楕円形〕	0.84 × 0.59	21	平坦	直立	人為		

(4) ピット群

第1号ピット群（第31図）

位置 調査2区南部のH 11h1～I 11a3区、標高20mほどの台地平坦部の東西8m、南北16mの範囲にピット16か所を確認した。

規模と形状 平面形は径32～76cmの円形または楕円形で、深さは11～42cmである。

遺物出土状況 繩文土器片16点（深鉢）、剥片1点が出土している。Q 10はP 15覆土中から出土している。

所見 出土遺物は混入したものと考えられる。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。



第31図 第1号ピット群出土遺物実測図

第1号ピット群出土遺物観察表（第31図）

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	等級	出土位置	備考
Q 10	残片	19	19	23	0.99	チャート	一側面に両面からの急角度の加工を施す	P 15 覆土中	PL 6

表10 第1号ピット群ピット計測表

番号	位置	形狀	規格(cm)		番号	位置	形狀	規格(cm)		番号	位置	形狀	規格(cm)				
			長径	短径				長径	短径				長径	短径			
1	H 11a2	円形	48	44	37	7	I 11a2	円形	42	40	11	12	I 11a2	円形	40	40	18
2	H 11a2	楕円形	54	42	23	8	I 11a2	円形	54	50	42	13	I 11a2	楕円形	56	46	19
3	H 11a2	円形	32	32	42	9	I 11a2	【楕円形】	(60)	48	22	14	H 11b1	楕円形	68	48	22
4	H 11a2	円形	38	36	16	10	I 11a1	楕円形	40	36	23	15	H 11b1	楕円形	76	62	21
5	H 11a3	楕円形	50	44	36	11	I 11a2	円形	38	38	12	16	H 11b1	楕円形	58	52	18
6	H 11a3	円形	40	38	13												

第2号ピット群

位置 調査2区南部のH 10b8～I 11a1区。標高20mほどの台地平坦部の東西14m、南北15mの範囲からピット12か所を確認した。

規模と形状 平面形は径24～90cmの円形または楕円形で、深さは16～54cmである。

遺物出土状況 繩文土器片4点(深鉢)が出土している。いずれも細片のため、図示できなかった。

所見 出土土器は混入したものと考えられる。ピットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。

表11 第2号ピット群ピット計測表

番号	位置	形狀	規格(cm)		番号	位置	形狀	規格(cm)		番号	位置	形狀	規格(cm)				
			長径	短径				長径	短径				長径	短径			
1	I 11a1	楕円形	54	46	54	5	I 10b0	円形	50	48	24	9	I 10b0	楕円形	84	72	30
2	I 11a1	楕円形	70	50	40	6	I 10b0	楕円形	34	24	17	10	H 10b8	円形	40	40	30
3	I 10b0	楕円形	50	44	45	7	I 10b0	楕円形	46	36	53	11	I 10a1	楕円形	90	64	26
4	I 10b0	円形	64	62	31	8	I 10b0	楕円形	70	41	27	12	I 11a1	楕円形	36	32	16

第3号ピット群（第32図）

位置 調査2区北部のG 10b3～H 10b6区。標高20mほどの台地平坦部の東西14m、南北10mの範囲からピット4か所を確認した。

規模と形状 平面形は径30~60cmの円形または椭円形で、

深さは5~26cmである。

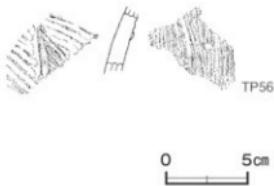
遺物出土状況 繩文土器片1点(深鉢)が出土している。

TP56はP2覆土中から出土している。

所見 出土土器は混入したものと考えられる。ピットの分

布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明

である。



第32図 第3号ピット群出土遺物実測図

第3号ピット群出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴ほか	出土位置	備考
TP56	縄文土器	深鉢	長石・雲母	明赤褐色	普通	外・内面に柔軟な施文後、内面はナマ、外側に後継文で区画、区画内をテテ	P2覆土中	PL.5

表12 第3号ピット群ピット計測表

番号	位置	形状	規模(cm)		番号	位置	形状	規模(cm)			
			長径	短径				長径	短径		
1	E1066	椭円形	60	46	26	3	G9g3	円形	34	34	14
2	E1066	円形	30	20	5	4	G10g3	椭円形	40	34	16

第4号ピット群

位置 調査2区北部のG9e7~G9g0区、標高20mほどの台地平坦部の東西10m、南北10mの範囲からピット4か所を確認した。

規模と形状 平面形は径24~78cmの円形または椭円形で、深さは14~54cmである。

所見 ピットの分布状況から建物跡は想定できない。時期・性格ともに不明である。

表13 第4号ピット群ピット計測表

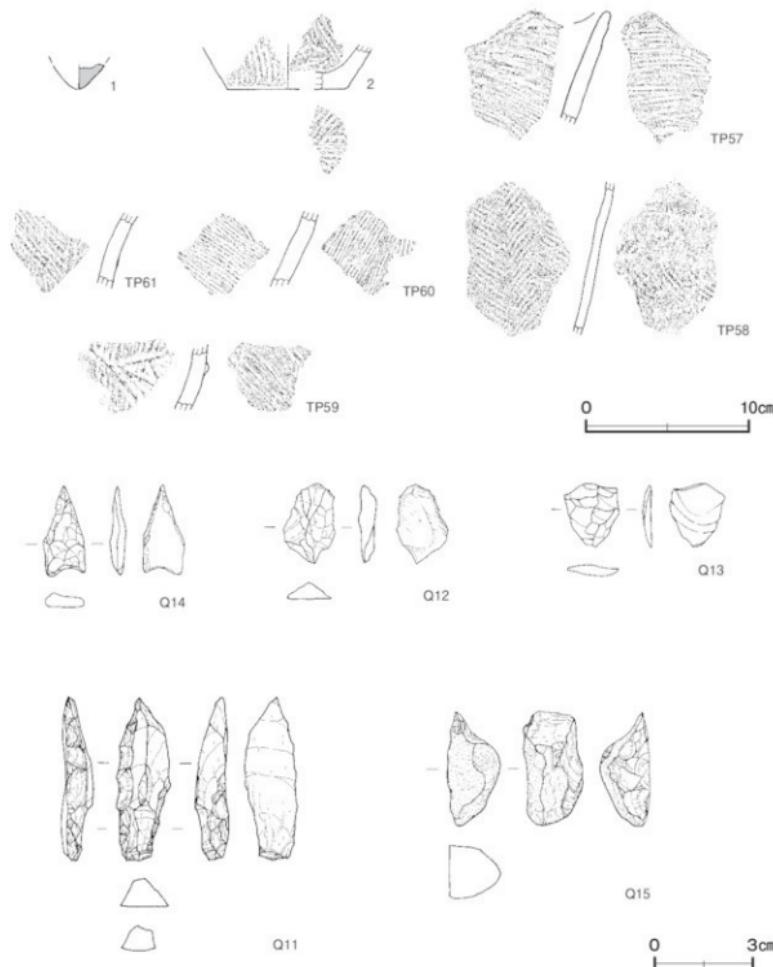
番号	位置	形状	規模(cm)		番号	位置	形状	規模(cm)			
			長径	短径				長径	短径		
1	G9g0	椭円形	30	24	14	3	G9g3	円形	38	38	14
2	G9e7	椭円形	78	48	54	4	G9e7	椭円形	58	50	17

表14 その他のピット群一覧表

番号	位置	範囲	柱穴数	柱穴形状	径(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考
1	H11b1~11a3	8×16	16	円形・椭円形	32~76	11~42	縄文土器、調片	
2	H10h8~11a1	14×15	12	円形・椭円形	24~90	16~54	縄文土器	
3	G103~H1066	14×10	4	円形・椭円形	30~60	5~26	縄文土器	
4	G9e7~G9g0	10×10	4	円形・椭円形	24~78	14~54		

(5) 遺構外出土遺物(第33図)

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、実測図と観察表を掲載する。



第33図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第33図）

番号	種 別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴 ほ か	出土位置	備 考
1	縄文土器	深鉢	-	(15φ)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通	尖底	表土	5%
2	縄文土器	深鉢	-	(28φ)	17.4	長石・石英・雲母	にぶい赤褐色	普通	底部・側部外面に条痕文	表土	5% PL. 4
番号	種 別	器種	胎 土	色 調	焼成		文 様 の 特 徴 ほ か			出土位置	備 考
TP57	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	普通		外・内面に条痕を施後、ナデ			表土	PL. 4
TP58	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄褐色	普通		外・内面に繩文			表土	PL. 5
TP59	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐色	普通		外・内面に条痕文 外面に微隆起縦文による区画			表土	PL. 4
TP60	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黄褐色	普通		外・内面に条痕文			表土	PL. 4
TP61	縄文土器	深鉢	長石・雲母	棕	普通		微隆起縦文で区画 区画内に条痕文			表土	PL. 5
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴			出土位置	備 考
Q 11	+/-形切妻	50	16	1.1	7.32	安山岩	一側縁に調整を施す			表土	PL. 6
Q 12	削片	25	16	0.6	1.53	チャート	片面中央に棱			表土	
Q 13	削片	20	17	0.3	0.72	チャート	調整削片			表土	
Q 14	旗	28	13	0.4	1.49	チャート	四基 両面調整 細かい進続する周辺調整を施す			表土	PL. 6
Q 15	削片	35	16	1.8	10.86	瑪瑙	上方向からの剥離痕			表土	

第4節 まと め

1 はじめに

今回の調査によって、縄文時代早期後葉の堅穴建物跡2棟、炉穴4基、炉跡2基、土坑29基、時期不明の道路跡1条、溝跡6条、土坑8基、ピット群4か所を確認した。主な出土遺物は、後期旧石器時代の石器（ナイフ形石器）、縄文時代の土器（深鉢）、石器（有尖頭器、鎌、敲石、石錘）、江戸時代の土製品（五徳）、瓦片（残瓦）である。各時代の遺構と遺物について概観することで、まとめとしたい。

2 旧石器時代

安山岩製のナイフ形石器1点が、表土から出土している。当遺跡から後期旧石器時代の遺構は確認できなかったが、後期旧石器時代も人々の生活領域であったと考えられる。

3 縄文時代

(1) 堅穴建物跡について

堅穴建物跡2棟を調査2区中央部で確認した。堅穴建物跡の立地する調査2区中央部から南部にかけては、南へ緩やかに傾斜している。平面形はいずれも楕円形で、炉を伴っていなかった。時期は、出土土器から早期後葉の茅山下層式期に比定でき、野鳥式・鶴ヶ島台式の条痕文系の土器も出土している。

(2) 炉穴について

第2・4・5号炉穴は調査2区北部、第3号炉穴は調査2区中央部で確認した。出土土器から第2・3号炉穴は早期後葉の茅山下層式期に、第4・5号炉穴は早期後葉に比定できる。第2・4号炉穴は、火焚

部から足場を軸線として 90 度ずれる位置関係にあることから、風向きの影響を考慮して作り替えたものと考えられる¹⁾。第 5 号炉穴は、火焚部を 2 か所確認した。2 次期にわたって使用されていたと考えられる。

(3) 集落について

第 1・2 号竪穴建物跡及び第 3 号炉穴は近接しており、それぞれ茅山下層式期に比定できることから、同時に存在している可能性がある²⁾。このような組み合わせは、調査区域から東へ 600 m ほどに所在する下高井向原遺跡の第 1・4 号竪穴建物跡と第 5 号土坑（炉 6 か所）・第 11 号土坑（炉 1 か所）や、東へ 900 m ほどに所在する甚五郎崎遺跡の第 6 号竪穴建物跡と第 44 号土坑（炉 6 か所）でも確認されており、当遺跡との類似性がみられる。早期の集落が、北相馬台地の縁辺部及び小高い尾根状の台地に立地する傾向がある。

4 小結

今回の調査区域は、神明遺跡の東側にある。調査結果から、後期旧石器時代は狩り場として人々の生活領域であったこと、当遺跡の範囲は同じ台地上にあり、地形的に連続している調査区域まで延びていると考えられること、当遺跡の東側に位置する下高井向原遺跡及び甚五郎崎遺跡と同じ縄文時代早期の集落があつたことの 3 点が確認できた。

今回の調査区域は狭小であるため、神明遺跡の全体像を把握することは難しい。今後、当遺跡を含めた周辺地域の調査研究が積み重ねられることによって、北相馬台地における縄文時代の集落の様子が、より鮮明に解明されることを期待したい。

註

- 1) 小林謙一「縄文早期後葉の南関東における居住活動」「縄文時代」第 2 号 縄文時代文化研究会 1991 年 5 月

浅い掘り込みの炉穴の重複について「風向きの変化する間の時期には両方の向きが必要なため…」とある。本跡の位置関係から、風向きの影響を考慮して、作り替えたと考える。

- 2) a 坪井清足『縄文文化論』岩波講座 日本書紀 1 原始および古代 [1] 岩波書店 1964 年 4 月

「花輪台貝塚は五個の貝塚の一つ一つに竪穴が発見されており、小貝塚群といったものであるが、土器形式が二形式に分けられるので、一時期にいとなまれた住居の数はせいぜい二三十戸ぐらいと推定される。」とあり、1 棟あたり 4~5 人が住んでいれば、10 人前後の小入数が集落人口と考えられる。

- b 瓦吹歎「茨城県における縄文時代集落の諸様相」「第 1 回研究集会基礎資料集 列島における縄文時代集落の諸様相」縄文時代文化研究会 2001 年 12 月

花輪台貝塚と水戸市十万原遺跡、差走遺跡を例に挙げ、早期の住居跡について「2 軒が隣接して一つの単位を示している点など共通性がみられる。」と言及している。

参考文献

- ・茨城県史編さん第一部会原始古代史専門委員会「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」茨城県 1979 年 3 月
- ・中山忠久「取手都市計画事業下高井特定土地区画整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 甚五郎崎遺跡 下高井向原 I 遺跡 下高井向原 II 遺跡」「茨城県教育財团文化財調査報告」第 107 集 1996 年 3 月
- ・諸星政得・鈴木加津子・鈴木正博「取手と先史文化 別巻 1」取手市教育委員会 1984 年 3 月
- ・川島真澄・富山かおる・高下保佐子・飯田美智子・本多昭宏「茨城県取手市大渡 I 遺跡 平成 5 年度発掘調査報告書」取手市教育委員会 1994 年 3 月
- ・石井寛「縄文時代集落研究の現段階」「関東地方における集落変遷の歴期と研究の現状」縄文時代文化研究会 2001 年 12 月
- ・茨城県農地部農地計画課「土地分類基本調査 薩ヶ崎」茨城県 1987 年 12 月

写 真 図 版



遺跡遠景（南から）



調査2区全景（南東から）

PL2



第1号竪穴建物跡
完掘状況



第2号竪穴建物跡
完掘状況



第10~14・16~22・
24・32・35・36号
土 坑
完掘状況



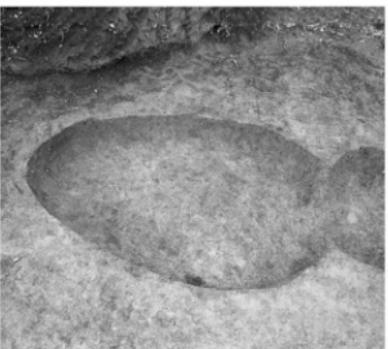
第3号炉穴完掘状况



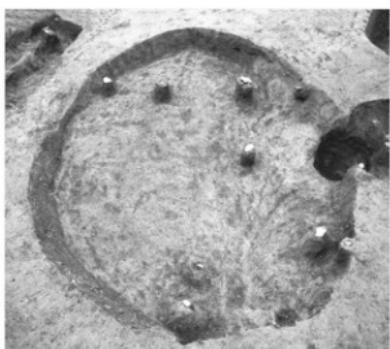
第11号土坑遗物出土状况



第17号土坑遗物出土状况



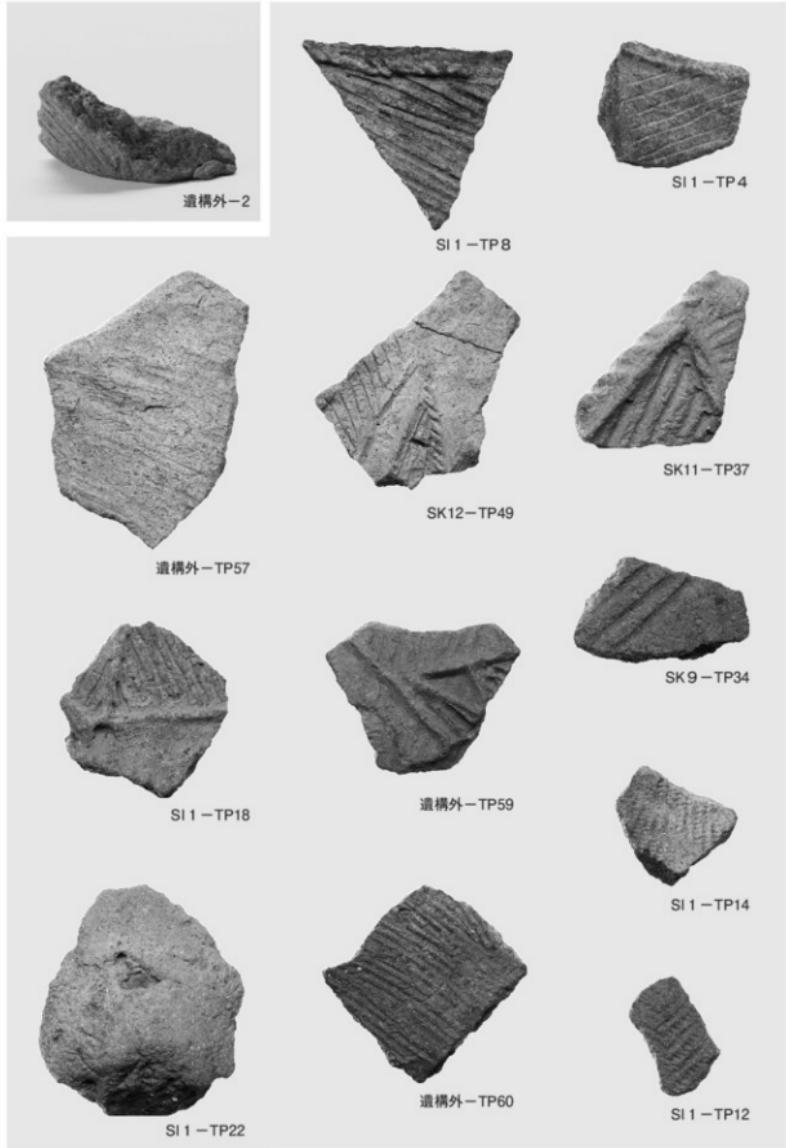
第17号土坑完掘状况



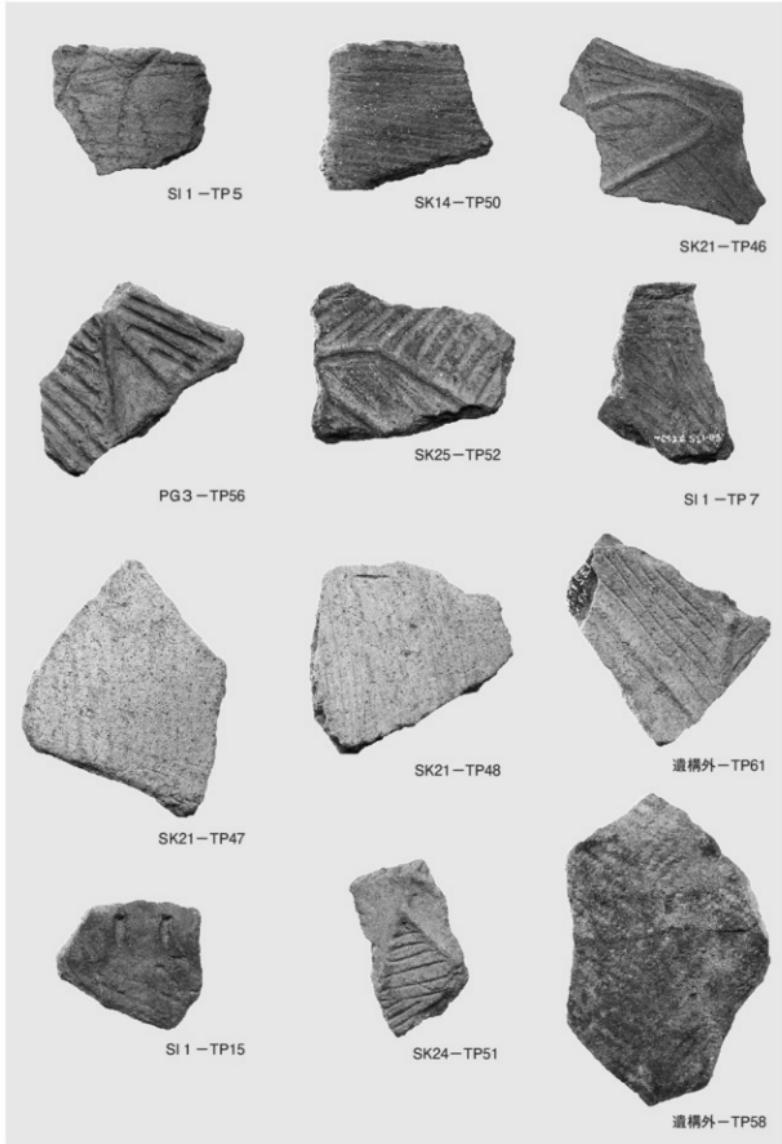
第21号土坑遗物出土状况



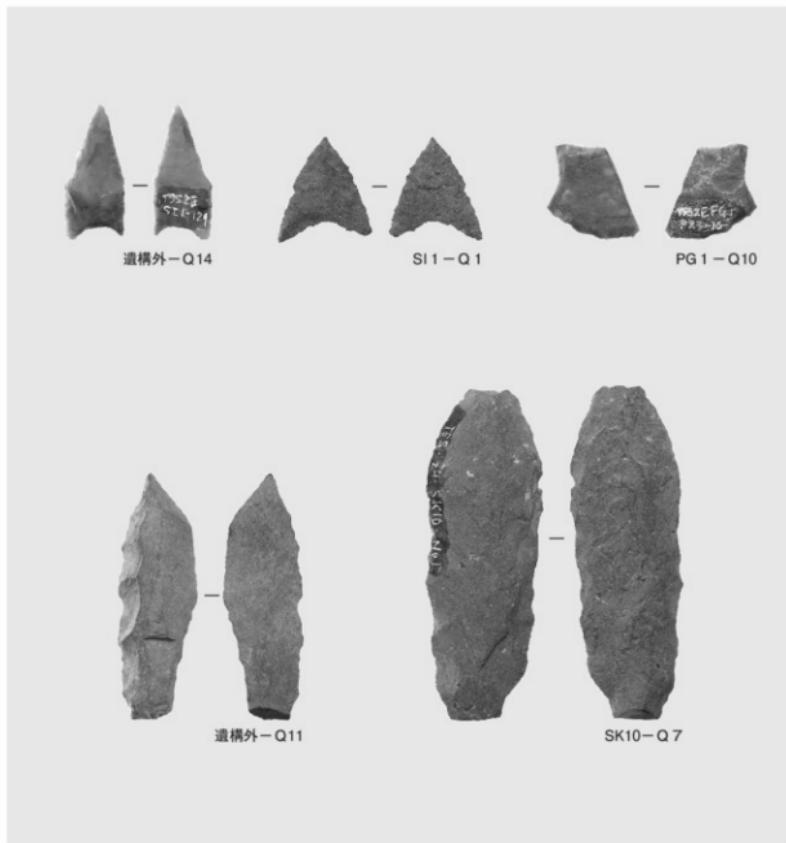
第5号溝跡完掘状况



第1号竪穴建物跡、第9・11・12号土坑、遺構外出土土器



第1号竪穴建物跡、第14・21・24・25号土坑、第3号ピット群、遺構出土土器



第1号竪穴建物跡、第10号土坑、第1号ピット群、遺構外出土石器・剥片

抄 錄

印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 7
Professional ServicePack1
編集 Adobe InDesign CS6
図版作成 Adobe Illustrator CS6
写真調整 Adobe Photoshop CS6
Scanning 6×7 film Nikon SUPER COOLSCAN9000
画面類 EPSON ES-G1100
使用Font OpenType リュウミンPro・L
写 真 線数 モノクロ175線以上 カラー210線以上
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿

茨城県教育財団文化財調査報告第386集

神 明 遺 踪

一般県道守谷藤代線道路整備 事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成26（2014）年 3月10日 印刷

平成26（2014）年 3月12日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財团

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

H P <http://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 八幡印刷株式会社

〒310-0911 水戸市見和3丁目1528-38

TEL 0120-23-1473